

Hope

Fun

Support

Encounter



聖学院大学ボランティア活動支援センター

2022 年度事業報告書

Seigakuin Volunteer Support Center Report 2022

Love

Change

Exchange

Smile



『受けるよりは与える方が幸いである』

—新約聖書 使徒言行録 第20章35節

刊行によせて



ボランティア活動支援センター 所長
政治経済学部 准教授
若原 幸範

2022年度は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の制限が緩和され、対面での活動が少しずつ再開されました。特に、ボラセンとして最も大きな事業である「東北ボランティアスタディツアー」を再開できたことは大きな喜びでした。この間つながりを深めてくださっている“Team 大川-未来を拓くネットワーク”の皆さんとの交流を中心とする企画となり、今後の具体的な連携活動の展望が開かれました。コロナ禍において現地バスツアー実施のノウハウの継承が不安視されるなかで、プロジェクトリーダーの学生たちの活躍が光るツアーであったと思います。

さて、多くの皆さまに支えられてきたボランティア活動支援センターは、設立10周年を迎えました。その原動力は学生たちの想いと行動力、それを受け止めてくださる地域の皆さま、そして両者に寄り添いながら活動を支えるセンタースタッフであることは言をまちません。10周年に際し、私たちの経験を言語化・理論化し世に問いたいと考え書籍『共に育つ“学生×大学×地域”：人生に響くボランティアコーディネーション』を出版しました。その出版記念シンポジウムと合わせて開催した10周年記念“ボランティアの集い”には、学生・卒業生やお世話になっている地域の皆さま、元教職員の皆さまら100名を超える方々をご参加くださいました。ボラセンが多くの人に支えられていること、また豊かな人のつながりのなかにあることを再確認する、とても幸せな時間になりました。

この10年の道のりは決して平坦ではありませんでしたし、ますます混沌とする現代社会において大学もボラセンもその存在意義が問われる中、今後も多くの困難にぶつかることと思います。それでも、ボランティア活動に込められた人の想いと行動力に希望を見ながら、学生と地域と共に、私たちはこれからも歩んでいきます。

目次

刊行によせて	3
ボランティア活動支援センター 所長 若原 幸範	
特別編集「共に育つ“学生×大学×地域”—人生に響くボランティアコーディネーション」 出版記念シンポジウム	6
新入生のボランティア意識調査 —「2022 年度新入生アンケート」から—	27
センター年間行事一覧.....	29
各事業報告.....	31
1. ボランティアプログラム.....	32
(1) 学生サポートメンバー養成講座	
(2) 復興支援ボランティア事業	
i) 春の東北“オンライン”スタディツアー	
ii) 夏の東北“オンライン”スタディツアー	
iii) 冬の東北ボランティアスタディツアー	
iv) 釜石「キッズかけっこ教室」	
(3) 学内ボランティアプログラム	
i) シトラスリボンプロジェクト リボン製作会	
ii) 新聞紙エコバックづくりワークショップ	
(4) 視野を広げるボランティア教養講座・プログラムの実施	
i) 『カラコエの花』上映会&感想シェア会	
ii) LGBTQ+に関連した映画感想シェア会	
iii) あかかふえ未来会議クリスマスプレゼント企画	
2. 学生サポートメンバー(サポメン!)との連携.....	43
(1) サポメン!ミーティング	
(2) ボランティア勧誘 DAY!!	
(3) サポメンボランティア企画「Nice to meet 友」	
(4) 小さなボラセン	
(5) サポメン!ボランティアサロン	
3. 学内ボランティア団体の育成支援.....	46
(1) 団体の活動・運営支援	
(2) 団体の立ち上げ支援	
(3) 活動継続支援	
(4) 引継ぎタイムの実施	
4. 学生ボランティア団体サポート制度.....	48
(1) ボランティア・まちづくり活動助成事業	

(2) 聖学院大学復興支援等ボランティア交通費補助	
5. ボランティア情報のマッチング	54
(1) ボランティアマッチング相談対応	
(2) ボランティア情報の発信（掲示板・メールマガジン・LINE・Teams等）	
(3) 学外団体からのボランティア募集相談対応	
6. 授業・学内イベントへの協力	59
(1) 授業協力	
(2) ほたる祭り実施協力	
7. 外部との連携・協力など	61
(1) 「ボラフェス！2022」の実施	
(2) 地域イベントへの参画・登壇	
i) 地域イベントへの参画	
ii) 学生による外部イベントでの登壇	
(3) 法人内での連携	
i) 聖学院中学校中1総合学習L.L.T.「Learn Live Together」への協力	
(4) 関東地区大学ボランティアセンターネットワーク	
8. その他	67
(1) センター10周年記念事業	
i) 書籍「共に育つ“学生×大学×地域”人生に響くボランティアコーディネーション」の出版	
ii) 「共に育つ“学生×大学×地域”—人生に響くボランティアコーディネーション」出版記念シンポジウム	
iii) ボランティア活動支援センター開設10周年記念“ボランティアの集い”の実施	
(2) ボランティア活動支援センター広報活動	
i) WEB上での情報発信	
ii) 広報ツールの作成・更新	
(3) ボランティア活動支援センター研究会	
(4) コーディネーターのスーパーバイズ	
(5) 研修・勉強会参加実績	
(6) 活動発表・講師対応	
(7) 外部委員	
資料集	75
(1) ボランティア活動支援センター内規	
(2) ボランティア活動支援センター運営委員一覧（2022年度）	
(3) ボランティア活動支援センター運営委員会協議事項	
(4) メディア出演・掲載	
(5) 広報ポスター各種	

特別編集 「共に育つ “学生×大学×地域” 一人生に響くボランティアコーディネーション」 出版記念シンポジウム

聖学院大学ボランティア活動支援センターの開設 10 周年を記念し、センターでは今年度これまで紡がれてきた物語やボランティアの意味を「学生」「大学」「地域」それぞれの立場からまとめ書籍を出版し、それを記念してシンポジウムを実施しました。

開催日時：2023 年 3 月 21 日（火・祝）13：00～14：40

会 場：聖学院大学チャペル、
YouTube 配信とのハイブリッド開催

主 催：聖学院大学ボランティア活動支援センター

プログラム：

●開会挨拶 清水正之

（聖学院大学学長、学校法人聖学院理事長）

●第 1 部

導 入 若原幸範（ボランティア活動支援センター所長、
政治経済学科准教授）

書籍第Ⅰ章 学生ボランティア支援の理論と実際

書籍第Ⅱ章 学生ボランティアの可能性

概要説明：川田虎男（ボランティア活動支援センターアドバイザー）

エピソード報告：丸山阿子（元コーディネーター）

菅野雄大（卒業生、元 STEP 代表、学生サポートメンバー）

芦澤弘子（コーディネーター）

●第 2 部

書籍第Ⅲ章 学生ボランティアと地域

書籍第Ⅳ章 学生ボランティアと大学

概要説明：平修久（ボランティア活動支援センター前所長、名誉教授）

エピソード報告：鈴木玲子さん（認定 NPO 法人彩の子ネットワーク共同代表）

新井達也先生（自由の森学園高等学校前校長）

●総 評 西川 正さん（NPO 法人ハンズオン埼玉副代表理事）

●閉会挨拶 若原幸範（ボランティア活動支援センター所長、政治経済学科准教授）



開会挨拶

清水: 来賓の一人としてご挨拶申し上げます。今日はお集まりの卒業生、学生の皆様、教職員、来賓の皆様に、大学として心からお礼を申し上げます。今回企画本が出版され、私も寄稿させていただきましたが、この本の趣旨自体が学生そして大学や地域にとって、「ボランティア」活動とはどういうものか、またそこでの体験を記すことと、しかもそれをある程度理論化あるいは対象化してみるということでした。私が寄稿で書いた内容に関わったお話しをすこしして、ご挨拶に変えたいと思います。



まずボランティアということで言えば、この寄稿の中でボランティア活動の歴史的な背景を考えてみようと思いました。まずは、1960年代ぐらいから言われている「グローバルに考え、ローカルに行動する」という言葉を、一体誰が言い出したかということをちょっと探索するように書かせていただきました。

ボランティアと呼べる活動の始まり自体はかなり早いです。有史以来と言ったら言い過ぎかも知れませんが、やはり人が愛や慈悲という本質的な行動をとるということによるでしょう。少し振り返っても、日本に関しては、例えば奈良時代に行基というお坊さんがいて、支配者の権力と関係なく、日頃民衆を 3000 人

ぐらい引き連れて歩いていて、困窮者の多いところに救済施設をつくったり、水害が多いところに行ったら河原や土手を直すとか、あるいは水の不足しがちな地域では、ため池を作る(香川県などに今も残っています)ということをやっていました。支配者に睨まれて捕まりそうになるのですが、最後は聖武天皇が行基を奈良の大仏をつくるとき、その責任者に任命するということがありました。

あるいは鎌倉時代あたりから、死者を弔うというのを浄土系のお坊さんたちがやるようになった。それまでは死体は市中にほっぽっていたわけですけど、これも一つのボランティアといえます。江戸時代には、水害が江戸であると古着を持って橋のたもとでそれを困った人に分け与える庶民が出てきたり、このようなかたちで、ボランティアはずっとあるわけです。ただ問題はこの本では、そういう体験的なものをどう理論化や対象化していくかを考えてみることをしてみようかと受け止めました。もちろん支配者側もそういうことはずっとやってきたわけで「義倉」という災害の時のための米倉を用意するということは、中国、朝鮮半島、日本もやってきました。支配者側も、災害時、困った人を助けるということは当然念頭におかないと共同体が壊れてしまいます。ただその支配者の力と庶民の力の拮抗状態の歴史の中で、1960年代ぐらいからのボランティアの問題というのは、権力とは距離を置いたところで、それこそ NPO 的な、自主的な、組織的なそして迅速な行為なす、というボランティア活動が、だんだん実践され、かつ理論化されてきたわけです。

今日ご挨拶の中で述べておきたいのは、私自身の人生を振り返ってみて、1960年代から今に至る時代は、大きな劇的な世界観

の変化が起こった時代といえるということです。そのことだけをすこし申し上げておきたいと思います。1960年ぐらいまでいわば人間中心主義的な考え方(人間こそこの世界の主人公である)が世界を覆っていました。環境をぶっ壊すというのもまさにその人間中心主義から出てきているわけです。私の子どもの頃は川や海に何でも捨てるという、本当に屈託なく捨てるという時代でした。そういう時代から1960年代に急に世界観の変化が起こります。最初にその考え方が出てきたのは、アメリカやヨーロッパからです。人間中心主義を否定する、すなわち、人間を自然から排除することの方が正しいのだという考え方が出てきます。それは今にもその影響は残っており、たとえば山で岩登りをするとき、ハーケンという金属の支柱を岩に打ち込むことをやめるとか、あるいは山道を絶対外さないで歩くこととか、そうした行動をとることで自然が傷つかないようにする。要するに、自然を侵害してはいけない、人間がいない方が自然は豊かなのだというそういう発想の思想が出てきます。ただそれは非常に過激すぎ、揺れ戻しのようにになって、さらにもう一步そこを超えて、新しい意味での人間中心が出てきて、というような流れをちょっと本の中で書きました。その中にデュポスという人を取り上げたのですが、そのデュポスは、人間が手を加えることで自然がかえって再生したこともあるという例を挙げて、あたらしい人間中心主義を唱え、尊びました。当時は穏健すぎると思われたわけですが、デュポスはそこからさらに地域の問題を論じ、「地域」という言葉を引き出し重視します。地域というところでこそ人は自然を含めた生活空間を守って生きているのであって、その地域をつくっている環境をともかく維持

することそれが大事であるという、すこしまえの人間を全て否定するような考え方に対して、改めて過去の人間中心主義とは異なる意味での、人間中心的な考えをうち出してきました。

これは自然界の問題、世界観の問題なのですが、ボランティア自体もやはり今はそうした緩やかな意味での人間中心主義になってきつつあるように私は思います。そのことは、この本の他のところを見てもあまり歴史的な背景をお考えの論考はないのであえて書いてみたわけです。

そしてボランティアのもう一つの問題はやはりグローバルなことを考えつつローカルに行動するということ、この考え方が出てきたことです。象徴的で、非常に重要な意義を持っています。つまり皆さんがたずさわっている活動は、そのまま人間全体の問題に関わっているんだという風なつながりの意識ですね。そのところが大事だろうと私のような倫理学や哲学をやっているものは思う次第です。大学としても地域を重視する活動にずっとこの10年間、私は学長になって8年ですけどもそれにほぼ重なった時期に力を込めてきました。それがこういう形で、皆さんの努力で、こういう形で、こういう催しができるようになったことを心から喜びたいと思います。みなさんにおかれましては、皆さんのひとりひとりの行動が、ひとりひとりが目的をもって、ローカルに活動し動くことが全世界の人間の問題につながっているのだという意識をぜひ忘れないで、活動を続けてほしいと願います。

さらに一つ哲学的なことを加えますと、かつて理論と実践というのは分かれていることがむしろ大学の良い在り方だという考えがありました。学問研究と実践は別のものだという

考え方です。現在は、すこし違ってきていて、学びに伴う具体的な行動、それ自体が学問的な理念の実現だという発想が非常に強く世界的にあります。他方であまり強調すると、研究や学問が重視すべき客観性を揺るがしかねない問題ではありますが、同時に身体を伴った思想といえますか、身体を伴った活動をし、他者と交わることで、少しずつ何が正しいか、何をなすべきかの考えが進み、あるいは修正が可能となるという考え方に、意義を見出すようになってきています。

現在、コロナ禍のもとで楽しいはずの生活の大半を犠牲にしたと思っておられる方もおられるように思います。大学の卒業祝辞のなかでは言えなかったことにふれます。私自身は大学に4年半在籍しました。なぜか半年伸びたのですね。その4年半の正常に授業があったのは1年2ヶ月でした。残りは全部お休み、つまり学生のストライキで、学生が大学を封鎖していたのですから仕方がないのですが、そのことが私の人生にとってマイナスだったかという、むしろその間、徹底的に考えたし、徹底的に動いたし、私自身は、暴力的な運動はしませんでした、大学とは何か、大学で学ぶ学問とは何かということを考え抜いたといえます。だから4年半のうち1年と2ヶ月しか授業がなかったことが人生にとっては不利だったとはおもえない。不利という言い方もおかしいし、むしろ自分にとっては豊かな、何かの内側に生まれ、だからこそ、まさに今こういう仕事についていると思います。今ひょっとして大学の生活が不充足だったと思う方がいたら、それを補完するぐらいボランティアの活動や考え方を真剣に考え行動することで、きっと満たされるものがまた逆にあったのではないかと、このところをぜひ覚えて

いただきたいと思います。祝辞ではふれるにふさわしくないことでしたので、あえてこの親密な会ですので申し上げます。

東北の大震災の次の年にボランティアセンターはできました。きっかけはやはり大震災ですが、皆さんの活動は、1960年ぐらいから大きく変わってきた人間観や世界観の大きな変化・変革、自然観の大きな変化・変革が今私たちの足元にも及んでいるなかでの、劇的な変化の中での出来事であり行動であることを、どこかで感じ取っていただけたらいいなと思っています。

今日はおめでとうございます。実り多い活動が進展し、良き成果がありますよう心から祈っております。

導入

若原: 皆さんこんにちは。ボランティア活動支援センター所長の若原といいます。本日は休日にお集まりいただきありがとうございます。ボランティア活動支援センター10周年を記念するイベントを学生、卒業生の皆さん、またお世話になった教職員の皆さんや地域の方々とともに迎えることができ、大変嬉しく思っております。

さて、この10周年のイベントですが、この企画を始めたのはもう2年近く前になるかと思えます。その時から私はすでに所長だったわけですが、私は聖学院大学に着任したのが5年前です、ボラセンと深く関わり始めたのも所長になった3年前からです。ですから、私はこの10周年にあまり口は出さずに長く関わっておられる方々で企画していただくのがいいかと思っていました。ただ、1点だけこだわったのは書籍の出版という形で

この日を迎えたいということでした。といいますのは、私は教育学の専門ですけれども、その観点から見ると皆さんのボランティア活動の質そのものもそうですし、それをサポートするボランティアコーディネーターのコーディネーション実践が非常に質の高いものと考えております。ですから、これは我々内部だけにとどめておくのではなく、ぜひ世の中に広く発信していきたいと考えたというわけです。そこで書籍を出版するということで動き始めまして、川田さん芦澤さんには非常にご苦勞をおかけしましたが、完成させてこの日を迎えることができたというわけです。

さて、今回のシンポジウムですが、基本的には書籍の内容に沿った企画となっております。第1部はボランティアコーディネーターの実践、それから学生の皆さんの声をたくさん載せさせていただきました書籍の第1章と第2章に関する内容で構成しております。登壇者は現役コーディネーターの川田さん、芦澤さん、それから元コーディネーターの丸山さん、それから卒業生の菅野さんです。そして第2部では、学生ボランティアと地域、それから学生ボランティアの皆さんが大学に与えた多くの影響を掲載した第3章と第4章に関わる内容となっております。ご登壇いただくのは前所長の平先生、それから地域の方を代表していただいて認定NPO法人彩の子ネットワーク代表の鈴木玲子さん、それから自由の森学園高等学校の前校長新井達也先生です。それではさっそく中身に入っていきます。

第1部

川田：第1部、ボランティア活動支援センター

アドバイザーの川田、そして鯨の被り物をしているコーディネーターの芦澤さん、元コーディネーターの丸山さん、卒業生の菅野さんとともに短い時間ですがお送りしたいと思います。まず中身に入る前にこの場でお礼をお伝えしたいと思います。ボランティア活動支援センターが発足してちょうど10年が経ちました。スタートしたときは、私は週1日、丸山さんは秋から週2日、芦澤さんはパートタイムで週5日。全員パートタイムでスタートしました。「続けられるのかこのボラセンは？」というところからのスタートではあったのですが、その時の私の思いは「この3人が集まったのであれば日本一の大学ボランティアセンターを目指さなければ失礼だ！」とまで思えるメンバーでした。その思いは今も変わりません。そして日本一のボラセンって何かと考えた時に、それは「学生がボランティアで日本一輝く大学になること」だということを当時、学生だった山口さんまた坂口さんと一緒に考えてきたということです。その思いを100%達成できたかは別として、在学生・卒業生の皆さんが聖学院の学生ボランティアとして輝き続けてきたことがこの10年という節目につながっていると思います。そして、聖学院の学生は、ちょっとやらかすこともあるのですが、そういったことを温かく受け止めていただいた皆さんのおかげで10年を続けることができました。さらにそういった学生たちの姿をずっと応援してくださる先生方、このセンターができたのは学生の思いと私たちが着任する前からの先生方の思いと行動が今日につながっていると思っています。そういった中で私たちが今こうやって今日を迎えられたことを本当に感謝しております。そして、この仲間たちに感謝しております。

さて、第1章・第2章では、「学生ボランティア支援の理論と実際」、また「学生ボランティアの可能性」というのが章のタイトルとなっています。このテーマをもう少しここにいらっしゃる皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。問いとしては、「学生ボランティアはどうしてボランティアで成長するんだろう、どんな風に成長するんだろう」ということです。もちろん、社会への貢献が前提のボランティアですが、同時にそれによって人生が変わっちゃうぐらい変化をした学生たちがいました。さらにそういった熱い思いを持った学生の皆さんと私たちはどのように歩んできたのか。ボランティアコーディネーターとしてどう寄り添えたのだろうか。そういったことも一緒に考えてみたいと思えます。メンバーそれぞれの対話を通して考えていきたいと思えます。

学生はボランティアを通してどのように変化していくのか

川田:最初に、学生はボランティアを通してどのように変わっていくのだろうかというところから卒業生で、学生時代に復興支援活動を行い、ご自身も被災経験のある菅野さんからお話いただけたらと思えます。

菅野:皆さんこんにちは。こども心理学科卒の菅野雄大です。私は宮城県仙台市の沿岸部で生まれまして、東日本大震災を経験しました。被災をして、全国の方々に助けられて、僕がそこで初めて出会ったのがボランティアという言葉でした。そこから徐々に自分がボランティアをする側に変わっていき、中学3年生の時からずっと復興支援に関わっています。大学進学は県内の大学でもよかったのですが、全国で何か恩返ししたいという

思いで探していたら、ボランティアにすごい力が入ってる聖学院大学を見つけました。こども心理学科に進学することで、何か自分に得られるものがあるんじゃないかと思って入学しました。そこからどっぷりボランティアに関わっていくんですけど、今振り返ると、当時はずっと一人でがむしゃらにやってたなと思えます。大学入学したら、すぐに団体立ち上げてやるぞみたいな勢いで行ったんですけど、そういったところでずっと一人で走ってたなと思えます。ボランティア団体を立ち上げたいというのはずっと自分の中にありました。というのは、大学の広報誌を見て、大学が岩手県釜石市に継続的に支援行ってるという所は知っていました。けれども、僕としてはやっぱり仙台市にも来てほしいという強い思いがありました。そこで、入学後、すでに復興支援の団体があるのに新たに団体を立ち上げていいのかなと思いつつ、団体の立ち上げの相談をしにボラセンに行きました。「団体を立ち上げたいんだ」と、「仙台市に学生を連れてきたい」ということでドアをノックしたのがボラセンの皆さんとの出会いだったと思えます。そこで初めて相談に乗ってくれたのが芦澤さんで、親身に相談に乗ってもらって、そこから突っ走っていく4年間を送りました。自分の中で成長に関しては、今まで一人でしたのですが、ボラセンの皆さんも含め本当にいい仲間たちに出会えて、振り返れば自分一人ではなく仲間たちと卒業というところまで行けたのかなと、今振り返って思いました。なので、そういった場づくりとか、環境というところを整備してもらったのはボラセンの皆さんだったのかなと思えます。

川田:ありがとうございます。菅野さん自身が

ボランティア活動を通じて変わったなとか、菅野さんの場合、将来の進路まで影響してたかなと思うのですが、その部分をもう少し聞かせてもらってもいいですか。

菅野:そうですね。まず変わったのが大学進学かなと思います。将来の仕事もボランティアの経験を生かしたいと思ってはいたのですが、なかなか防災とかこれまでの活動を活かせる会社はなく、次にやりたいと思っていたこともと関わる仕事をやりつつ、学生時代から始めた語り部活動を継続していました。そういった中で自分の道が変わったというか、なんかこれを仕事にできたらいいなと思っていた矢先に、今の防災に関わる仕事に就けたので、本当にこれまで関わり続けてきたからこその道だったのかなと思っています。

コーディネーターは学生とどう向き合い支えているのか

川田:ありがとうございます。ご自身も被災経験がある中でボランティアも、語り部活動もしてくださっていました。それが現在の仕事にもつながっているということですが、ここからは芦澤さんにコーディネーターとして、菅野さんにどのように寄り添ったのか、どのようにサポートしたのかということをお話いただけますか。

芦澤:先に今私が被っている、この被り物が何かを説明したいのですが、これは学生たちのボランティア活動の勢いを大量発生する魚のボラに掛け合わせて大学がポスターを作成したことがあって、そのタイミングで作ったボラのカブリモノです。菅野さんに関しては、私が何か大切な関わりを持ったかという自

信はありませんが、菅野さんが入学した 2015 年頃はボラセンができて数年経って、地域とのつながりも少しずつ見えてきたし、あと他大学のボランティアセンターとのつながりも見えてきたところでしたが、唯一復興支援活動だけ大学独自で実施していて、他の大学の活動の様子がわからない状況でした。そんな中、2014 年の 12 月に東北学院大学が事務局となって実施している大学間連携災害ボランティアシンポジウムの開催と合わせて、復興支援に携わる大学ボランティアセンターのつながりをつくろうという呼びかけがありました。独自でやるのも良いけれどネットワークに参加して情報を得ながら活動するってすごい大事だなと思い、シンポジウムに参加したのが菅野くんの団体立ち上げ相談に応じるきっかけにもなりました。シンポジウムの際に、当時東北学院大学に在学していた学生さんが「今度私の後輩の菅野雄大さんが聖学院大学に入学します。彼はボランティア活動団体を立ち上げたいと言っているのでぜひサポートしてほしい。」と声をかけてくれました。この話を聞いて、菅野さんの入学を心待ちにしながら、復興支援団体を立ち上げるためのサポート体制も考えはじめました。大学には当時、復興支援ボランティアチーム【SAVE】という、大学の声がけをきっかけに立ち上がった団体がありました。けれども菅野さんが新たに復興支援団体を躊躇なく立ち上げられるようにサポートしなきゃというもありましたし、立ち上げて自分たちで仙台に行って活動するということで、大学として交通費の補助をしようとか、あと自分たちで活動をやるにあたって色々とお金が必要なので「ボランティア・まちづくり活動助成金」も菅野さんが 1 年生の時に始まりましたけど、そういった金

銭面でのサポート体制も少しずつ整えつつあったということです。菅野さんは、自ら切り拓いていける人なので、ボラセンとしてなんかこう関わったかというとうどうですかね。

川田:時折、ボランティアしたくて聖学院大学に来るといふ気合の入った学生さんがいらっしゃるのですが、ボラセンとして大してやっていないかという芦澤さんのコメントに対して菅野さんどう思われますか。実際のところコーディネーターはどんな関わりをしていましたか？

菅野:先ほどの交通費補助の話で、年に2回まで使えるというお話だったんですけど、僕はみんなのために整備してくれたというのは今聞いたんですけど、なんで2回なんだと僕はずっと言ってて。継続的に仙台に行きたい、僕は人との関わりをすごい大事にしたいってそういう中で2回というのはちょっと僕にとっては少なかったんで、相談したら、芦澤さん含めボラセンのコーディネーターがボランティア・まちづくり活動助成金を交通費に回してもいいと言ってくれたおかげで年に4、5回、学生たちを仙台に連れて行くことができたので、そういうところで僕はサポートもたくさん受けました。



川田:なるほど。芦澤さんどうですか。

芦澤:そうですね。本当に菅野さんは先頭を走り続けていたので、先頭走り続けるなりの不安もあるだろうなと思っていました。なので、そのまま走っていて大丈夫だよ、みたいな関わりだったのかなと思います。それぞれの歩むスピードは違うと思いますが、それぞれのスピードに合った関わりができていたら嬉しいです。

川田:ありがとうございます。書籍では、「コーディネーターの役割とは何だろう」ということを考えさせていただきました。今の菅野さんのお話や芦澤さんのコメントも入っていますが、コーディネーターはやっぱりその人の「思い」だったり、「力量」を見定めた上でサポートする関わり方を考えているということがありします。さらにより主体的にチャレンジできるように皆さんの「自分たちが考え自分たちで決められる」という自己決定を大切にしています。だから「ボラセンが言ったからやる」ということはなくて一人一人が考えて自分で決められるように、そういった関わりをすごく大切にしています。あと関わりとして「絶対に指示はしないぞ」とかですね。あと「できれば活動の後しっかり振り返るぞ」と、それがしっかり皆さんの学びや成長につながるよう、私たちにやりやっていたかなということが見えてきました。さらに書籍では「ボランティアをすることは学生にとってどんな意味があるの」ということについても触れていますが、菅野さんの話の通り社会的なスキルと言って、コミュニケーション能力や自己肯定感が向上するとも言われているのですが、それだけじゃなくて「自分は何が楽しいのか、悲しいのか、嬉しいのか」

等の生き方に関わる部分で、考えるだけじゃなくて気づく・感じることができるのがボランティアのよさかなって思っています。菅野さんのように、自分の生き方を定めて、ある意味ではそれが職業に繋がっていくということや必ずしも職業じゃない場合もあるんですけれども、そういった自分自身の道を切り拓いていくということにもつながっていくのかなと思います。市民性の涵養(かんよう)というやや専門的な言葉なのですが、そういったものも少し見えてきたかなと思います。さらに、「どうしてそういった変化が起こるのかな」ということも考えてみたんですが、一つ切実な課題に直面し実感するということがとても大切だと考えています。被災地はまさにそういった切実な課題が溢れていますよね。また、私たち「カッコいい大人に出会ってほしい」ということをよく言うのですが、ロールモデルになるような大人に出会えたことで自分の人生が変わっていくという事例もありました。あと「ボラセンに行くのと褒めてもらえる」と言ってくれる学生がいるのですが、やっぱり自己肯定感高まるには他者から褒めてもらわないとですよ。ボラセンは基本、否定しませんので。そういったところも含めて皆さんの変化につながっているのかなということを章の中では触れさせていただいています。

「人生に響くボランティアコーディネーション」 に込めた思い

お二人の対談からさらに一歩進んでこの本のサブタイトル「人生に響くボランティアコーディネーション」について、発案者の丸山さんに語っていただきます。あわせて、ボランティアコーディネーターとして一番大切にしてきたことは何かというその2つについて教

えていただけますか。

丸山: みなさんご無沙汰しております。2年前に退職させていただきましたが、舞い戻ってまいりました。ちょっとタイトルを大きくつけてしまったので、今日、みんなの顔を見てから話す内容を決めようかなと思っておりました。人生に響くコーディネーションとは何でしょうね。「問いかける」のがやっぱりボラセンなんですよね。ボランティアって、学生生活の中の本当にたった一部の時間だったかなとは思いますが、そのプロセスにおいて誰も失敗せずに卒業した人がいないというのが、多分、聖学院大学のボランティアの良さかな…というのを、今日みんなの失敗談とかも聞きながら感じているところです。人生のいろんなところで失敗か成功かという二択ではなくて、本当にどんな活動においてもいろんな失敗をしながら振り返りをして、さらに成功できるように自分の思いが届くようにという、その振り返りしながらのプロセスを私たちもすごく大切に育んできました。みんな結構失敗するのが怖かったりとか、何かダメなこととか間違ったことを言ったりやったりした時に否定されたり怒られたりしてきた学生たちがすごく多いというのを、私も10年間で痛感していました。そういう学生たちが、じゃあ社会に行った時にどういう風になっていくのか思い描いた時に、例えば会社に入って上司に怒られたらもう自分はここに必要がない人間なんだと思わないかな?とか、やっぱりいろんなことを思い描いた時に、まず私たちがそのささやかな不安とか、この地域とか社会に対する疑問をまず聞ける存在になりたいなと思って、当時20代でピチピチだったと思うんですけど(笑)、10年前に参画させていただきました。

みんながまず不安に思っていることを学内数千という規模の中で、例えばボラセンなら安心して不安を吐露できるとか、例えば「あっしー(芦澤)聞いて」とか、「あこさん(丸山)実は」というその失敗談も含めて私たちは笑いながらずっと受容して、許容してきたんですね。きっとその不安を言えると言うところがまず一歩踏み出すスタートになっていて、そこから「実はこの人とかこういうことやってみたい」とか、「この地域の団体とかこういうことを一緒にやってみたい」というその一歩にまたつながっていく、そういう一人一人のストーリーをずっと追いかけてながら 学生をエンパワメントしてきました。授業と違うのは自ら課題を見いだして、そこに向き合いながら自分で選択したり、交渉したり、チームを作ったり、仲間と実際に現地に訪れたりとか、その行動と選択をコーディネートというよりはエンパワメントしていくような関わりを意識的に行って来ました。小さなチャレンジを積み重ねた人、大きなプロジェクトを回した人、いろんな葛藤があったと思うんですけど、失敗したりとか、「あんなことあったよね」って、10年経ってこういう風にまた語れる場があることがすごく私の人生にも響いてるなと思います。

コーディネーターとして一番大切にしていること

コーディネーターとして一番大切にしていたこと、それは「答えない。」ですかね。絶対ボラセンは答えないですね。答えないしアドバイスもしたくないんですよ。みんな相談に来た時に本当は分かっているし、本当はこうしたいという気持ちがあるんですね。でもそれを大人に否定されたくないから言えずにしまっておくという場合がすごく多かったんですね。

なので私たちは常に問いかけてきました。私が人生に響くボランティアコーディネーションを一言で言ったら、みんながそれを答えとして持ち帰っちゃうんですね。でも皆さんが体験者としてどういうところが自分の人生に響くのかを、ご自身に問いかけ続けてほしいなと思って、今回、大々的に副題付けちゃったところもあります。自分の人生の主演はいつも自分じゃないですか。私たちはあくまでも脇役のコーディネーターなんですよ。なので皆さんの内側にこもってるものとか、ムズムズしてるものを問いかけと対話の中から引っ張り出して、みんながそれをやりたいと思った時によしよって背中を押す、そういう場でありたいなと思いながら、コーディネートをしてきました。

川田:ありがとうございます。今の話を聞いて、私たちも事業の成功失敗ということよりは「学生がどこまで本気になれたか、なれなかったか」ということの方が100倍大切にしていたなと思います。もちろんうまくいった方がいいのだけど、でも本気でやって失敗して涙を流したら、私たちは後ろで「しめしめよく頑張ったな」と、「次は大きく成長するな」みたいなことは話していました。あの人の涙やこの人の涙とかですね、会場で目が合う人が何人かいらっしやるのですが、「嘆きの部屋」と呼ばれるボラセンの一角でみんなよく泣いてたなとか、いう人がチラチラいらっしやいます。あの時の涙が次のステップにつながってたなとか、もしかしたらそれが「人生に響くボランティアコーディネーション」につながっていたのかな、というふうに感じました。これで前半戦を終了させていただきます。皆さんありがとうございます。

第 2 部

平: それでは第 2 部に移ります。進行役の平です。よろしくお願いいたします。2016 年から 2019 年にかけて、ボランティア活動支援センターの所長をさせていただきました。第 2 部の登壇者は、NPO 法人彩の子ネットワーク代表の鈴木玲子さんと、自由の森学園高等学校前校長の新井達也先生です。進め方としては、私が最初に 3 章、4 章の概要を合わせて紹介し、その後、鈴木さんと新井先生には関連する具体的な話をさせていただきます。

3 章に入る前に、本の裏話を一言だけさせていただきます。本のタイトルを決めることは難しいです。本のタイトルの、学生×大学×地域というのは、1 次元なのですね。実は三角形で表示したいという話が出たのですが、そうすると本のタイトルは何なのだと、困る人が出てくるだろうということで横に並べてしまいました。次の問題は何を最初にするかです。地域の方には失礼なのですが、学生、大学、地域という順番でタイトルをつけたという次第です。3 章 4 章は学生と地域、それから学生と大学の関係についての章です。

学生ボランティアと地域

平: まず、3 章は学生ボランティアと地域に関してです。地域の構成要素は地域社会、地域経済、地域環境ですが、学生は昼間地域で過ごす昼間の住民として地域社会にとって重要な一員です。首都圏でも地域社会はいろいろ多くの問題を抱えています。その一つが地域社会の担い手不足です。一方、まちづくりの担い手としては、「若者、よそ者、ばか者」ということがよく言われています。こ

れらの人々の共通点としては、地域とのしがらみがない、それから、ためらわずに自分の考えや思いを実行に移すということです。学生の多くは「若者」、そして「よそ者」、さらに学生は一つのことには一生懸命になる、いい意味での「ばか者」です。要するに地域が学生を受け入れれば、学生は重要なまちづくりの担い手になるということです。

次に、地域にとっての学生ボランティアの良さや効果を皆さんと確認したいと思います。まず、地域住民と若者が接する機会を提供され学生の存在が地域を元気にする。学生は気がつかないかもしれませんが、学生の存在にはそういう意味があります。そして、新しい視点、発想、知識、テクニックを習得できる。それから、活動の担い手も確保できるということです。

一方、学生にとっての地域のボランティアの意義は、日常的に過ごす場所で自己肯定感や達成感を獲得できる。地域との関係を構築し地域に対する愛着や誇りを強める。それから、自分の欠点に気がつき克服するきっかけや実社会を知る大切な機会が得られ、自分とは異なる世代と交流ができ、社会に様々な人がいることを実感し、自分を客観視できるようになります。少し欲張りな説明ですが、そのようなことになるかと思います。

このように、地域での学生ボランティア活動は地域を活性化させ、学生を成長させるということが言えると思います。地域と学生の思い、双方の関係が win-win、両方とも勝者になるように働きかけることがボランティアコーディネーターの重要な役割の一つです。

3 章では、地域での学生ボランティア活動の事例も取り上げています。子育て支援について、後ほど鈴木さんに話させていただきます。

それから、東日本大震災の復興支援の事例を紹介しています。加えて、地域と学生の協働の実践例として、岩手県釜石市でのキッズかけっこ教室、留学生による上尾市ハローコーナーニュースのベトナム語翻訳を紹介しています。また、学生の地域ボランティア活動をテーマにして、宮原西口商工会の元会長、卒業生、在校生による座談会を行いました。聖学院大学の位置する宮原・戸崎地区は、学生を温かく受け入れてくださって、地域を自分たちでより良くしようという住民が多くいらっしゃいます。そのため地域は学生の若さのメリットを享受し、大学は安心して学生を地域に送り出し、学生は地域で美味しいものを食べさせてもらいながら確実に成長しています。

学生が動けば大学が変わる

～聖学院大学学生ボランティアの歩み～

平：続きまして、4章は学生と大学との関係です。当然、学生は大学の重要な構成員です。学生が動けば、あるいはまた、学生が変われば、大学も動き変わります。

ここで、本学のボランティア活動の歴史を振り返ってみたいと思います。前身の聖学院女子短期大学の時代に、キリスト教に基づいた活動を行う学生サークルとして宗教委員会が設置され、そこで多くの学生がボランティア活動を行っていました。1988年に4年制大学に移行して、1998年に人間福祉学科、現在の心理福祉学科が設立されました。この学科では、生活の内側からの自発的な福祉づくりへの関わりをボランティア活動と位置づけ、当初から各教員が学生にボランティア活動を勧めてきました。その頃、宗教委員会は聖学院大学ボランティア・アソシエーション、

GRACE、という名前に変えて、児童養護施設や障がい者施設等でも活動するようになりました。

そして、日本全体では1995年の阪神淡路大震災を機にボランティア元年という言葉が生まれ、関西圏を中心に大学にボランティアセンターの設置が始まりました。本学でも、1999年ごろ、学生リーダーたちが大学全体として活動の活性化を目指すボランティアセンター構想を打ち出しました。ボランティア関連の3団体が集まり、ボランティア情報を一元的に扱い情報を発信するボランティア掲示板を設置しました。2000年には学友会の中でボランティア部会として位置付けられて、学生運営によるボランティアセンターに該当する活動が本格化していきました。そして、2011年に東日本大震災が起き、学生が募金活動したいということから復興支援活動が始まりました。まず、大学に復興支援委員会を設置して、その後、支援活動の実施のための復興支援ボランティアセンターを立ち上げました。センターの打ち合わせには多くの学生が参加しました。そして、全学的にボランティア活動の機運が高まる中、学生の思いが現在のボランティア活動支援センターの創設を強く後押ししました。

このように、学生のボランティア活動が大学に及ぼす影響として、まず直接的なものがあります。ボラセン創設直後、釜石の復興支援活動が大きな柱になりました。「復興のシンボルとして被災地に桜を植えたい」という学生スタッフの強い思いが他の学生を動かし、桜の盆栽を被災者に届けるという活動を始めました。

それから、学生のボランティア活動が大学に及ぼす影響として、学生の成長を通じて間

接的なものもあります。ボランティア活動を行っている学生はグループワークや参加型の授業に積極的に取り組んで、他の学生に良い影響を与えてくれています。しっかりと考える傾向が見られ、クラスの雰囲気を変えるような気づかいができる学生もいます。

そして、学生のボランティア活動は教員にも良い影響を与え、教員の地域活動に関する士気を高めたり、主体的に社会貢献に関わる教員が聖学院大学でも増えました。さらに、ボラセンでは教員が学生と一緒に行う活動に対して支援を行っています。ゼミに地域課題を積極的に取り入れている教員もいます。その事例として、4章では地域活性化、福祉教育、プレイパークといったゼミ活動を紹介しています。

また、ボランティア活動が活発なことは大学にとっての一つの特徴であり、社会貢献意識の強い高校生にとって大学選択基準の一つになります。先ほどの菅野さんのような学生が、本学を選んで在学中熱心に活動に取り組んだという例があります。また、少し話が飛びますが、最近の国の政策の一環として、高校と大学の連携が進められています。本学の場合、学生ボランティアが重要な役割を担っています。復興支援ボランティアスタディツアー（以下、スタディツアー）に高校生も参加して、準備段階から高校と連携しています。その具体的なお話は、後ほど新井先生にさせていただきます。また、中学校の授業で学生がボランティア活動体験を語り、社会との関わり方のロールモデルとなっている事例も4章の中で紹介しています。

このように、大学は学生のボランティア活動を促し、動き出した学生が大学の質を高め、高校生や中学生にも良い影響を与えている

と思います。以上で私の話を終わりにして、続きまして、鈴木さんに本学の学生と一緒に行った地域活動を紹介させていただきます。

地域から見た聖学院の学生ボランティアの姿

鈴木:皆様こんにちは。認定 NPO 法人彩の子ネットワークの鈴木玲子です。聖学院大学ボランティア活動支援センターの10周年、そして「ともに育つ学生×大学×地域～人生に響くボランティアコーディネーション～」の出版おめでとうございます。この10年、私たちは聖学院大学の学生さん、ボランティア活動支援センターの職員さんや教員の皆さんといろいろな活動を行ってきました。そのエピソードを少し報告させていただきます。

彩の子ネットワークは子育てしている母親たちが自分たちに必要な場所や関係を自分たちでつくろうと、活動している NPO 法人です。その一つに1万人の来場のある「こども☆夢☆未来フェスティバル」を3月に毎年開いてきました。子どもを人の関わりの中で育てていきたい願いから様々な分野の活動団体や企業の皆さんに実行委員会に参加していただいで一緒に開いています。聖学院大学からはサークルの Heart&Smile などが毎年参加しています。子どもたちと遊ぶ楽しいプログラムをその催しの中で考えて、準備して、当日来場した親子たちに声をかけつつ、その日を運営する。そんなことをしています。実行委員会では、他の団体や企業の方たちと一緒に会議を囲むという中で、自分たちのブースの紹介をするということもあるので、仲間たちでよく相談してその場に臨むとか、また、来る親子のことを考えてつくっていくとか、そんな一人ではできないことをやっているん

だなどと思っています。

彩の子ネットワークでは、毎日、「上尾市つどいの広場 あそぼうよ」と「さいたま市子育て支援センター みぬま」という2つの子育て支援拠点を運営しています。生後1ヶ月ぐらいから3歳までの親子が来る場所です。そこに学生さんたちはボランティアでだったり、サービスマーケティングでだったり来ていただいています。今、赤ちゃんや小さな子どもたちと出会うということは日常的にそんなに機会が持てないよと思う中で、ここに来て初めて赤ちゃんたちとどう付き合うのか、とても戸惑いながらとにかくその場所に行ってみるということをして、その先に子どもから話しかけてもらえたり、遊ぼうと誘われたり笑いかけられたり、そんな体験をして信頼されるって、何にも代えがたいことだなどと思います。はっきりと子どもに信頼された瞬間を持てたことで、みるみる花開いてった学生さんがいたなというのがすごく記憶に残っています。

子どもの虐待防止に取り組む

学生ボランティア

鈴木: 子ども虐待の問題と一緒に取り組んだことがありました。彩の子ネットワークでは、3歳の子を虐待死させてしまった事件を報道で知って、自分の日々の子育ての続きに虐待があるなと思った母親が、安心して自分の気持ちを話せる子育てサロンの場をつくるドキュメンタリー映像を制作したことがあります。「子育てサロンが生まれる日」というタイトルなんですけど、誰もが子どもを持ったら愛おしいし、大切に育てたいと思ってるけど日々の子育てでは言うことを聞かない子どもにイライラしたり、ぶつけてしまうようになっていたりして、落ち込んだり。子育てサロンは、否定されず

に話ができ、聞いてもらえる場所、共感してもらえたり、他の人の想いを聞くことで、違う考えに触れたり、また、子どもは一方的にはお世話されるだけの存在じゃなくて、その子自身の意志があるという事を知って、どうできるのかということを考えてるそんな様子の映像です。それを学生さんたちと母親たちと一緒に視聴した後に意見交換するという場を何回か持ちました。学生さんの中には親との関係が辛い方もいました。母親たちからは自分が学生だった時、若かった時にとんがっていた時を思い出して話してくれた人もいました。そんな意見交換をした後、学生さんたちは虐待してしまった母親のことを非難するだけではダメなんだという気づきを持ちました。

「映像の中の、産んだからすぐに子育てができるわけではないという母親の言葉が心に残り虐待はダメだと親を責めるだけでは、ギリギリの状況下で子育てしている親を追い詰めてしまうため、責めるのではなくその親の気持ちに寄り添うことが大切なのだと知りました。」これは卒業生の長嶋実咲さんが書いてくれた文です。この本に載っているものです。そんな気づきを持った長嶋さんが学園祭で、他の学生たちにこのことを伝えようと動いて、最後には「学生によるオレンジリボン運動全国大会」で堂々と発表しました。子育ての当事者ではない学生さんが虐待に向かいやすい子育ての状況を理解して自分のこととして伝えてくれたのです。そんな若者がいること、そんな地域になっていくということがすごいことだなぁと私は思いました。

ボランティア活動支援センターのコーディネーターの方たちは、一人一人の興味の持ち方やそれぞれの生活の様子に寄り添って落ち着いて取り組んでいけるように、また勇

気を持って発言できるように暖かく見守ったり、励ましたりして下さったのだと思います。私は地域の中に自分とは違う立場にいる人のことを想う、力のある若者がいるようになるすごいことだなと思いました。

コロナ禍となってからの子育ては、立ち会いや面会もできない出産から始まって、実家との行き来もできにくくって、さらに孤立が深まっている状況です。私たちが運営する子育て支援施設ではこれまで実施していたプログラムをオンラインで自宅から参加できるようにして、聖学院の学生さんたちもオンラインプログラムを企画して参加するようになりました。学生さん同士も対面で会合を持っていない中でプログラムのテーマ設定や、内容構成、画面のデザインを作り、進行役などの役割分担をして、一つのプログラムをつくってくれているんだと思います。子どもたちとの画面のやり取りもテンポよく、楽しく親子で参加できます。すごい力量だなあとと思います。また塗り絵をつくったり、クリスマスには折り紙のプレゼントが宅急便で届いたり、コロナ禍の中、お互いにできることは最大限やってみたこの3年だったなと思います。

2022年度はサービスマーケティングが再開されました。「あそぼうよ」に2人の学生さんが来て、赤ちゃんや子どもたちと付き合ってくれました。またフェスティバルのステージを共につくったりもしました。あとヴェリタス祭で「子ども服交歓会」を初めて一緒に運営しました。

聖学院大学ボランティア活動支援センターが発足して10年、私たちは聖学院大学の学生さんと一緒に、小さな子どもたちのこの楽しい時間をつくったり、子育てが抱えやすい孤立や虐待といった問題についての活動

を行ってきました。こんな風に一緒にさせてもらったことを振り返って、学生さんや教職員の方々との出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。学生さんたちは大学の学びとともに地域の活動に触れることで社会の課題を捉えていき、自分で考えて自分で動いていく力をつけていきました。自分の人生を自分でやっていけるとも素敵で大切なことだと思います。これから先もどんなことができるかなと共に探していきたいなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。

ボランティアを通じた高大連携

平:鈴木さん、ありがとうございました。続きまして、新井先生に高大連携で実施しました、ボランティアスタディツアーに関してお話しさせていただきます。

新井:みなさんこんにちは。自由の森学園高等学校の新井と申します。はじめにボランティア活動支援センター10周年本当におめでとうございます。私は、埼玉県飯能市にある自由の森学園高等学校で教員をしています。上尾市とはずいぶん距離もある、系列校でも何でもない自由の森学園が2017年から3年間、復興支援ボランティアスタディツアーに参加させていただくことができ、本当にありがたく思っています。

なぜ私たちがこのツアーに参加することができたのかということは、先ほど登壇されている丸山さんとのご縁がはじまりです。丸山さんからある時、聖学院大学のボランティア活動が紹介されている冊子を頂戴することがありました。その冊子にあった「復興支援ボランティアスタディツアー」に私自身とても興味を

持ちました。他の県立高校も一緒に参加されているということもあり、自由の森学園も参加させていただけないかと思っていたところ、みなさんのご厚意により参加できることになりました。なんと10名の生徒を参加させていただけることになったんですね。そのことを生徒たちに紹介したところ、参加したいという生徒が教室にいっぱい集まって、くじ引きで10人に絞りました。このようにしてスタートしたのが2017年のスタディツアーでした。しかも、プロジェクトリーダーということで、ツアーづくりも一緒にやってもいいよとお声をかけていただきました。参加することになった生徒たちのうち5、6人がプロジェクトリーダーに手を挙げました。

第1回目のプロジェクトリーダー会議で、ボランティアコーディネーターの川田さんと芦澤さんが本当に優しい笑顔で、「高校生のみなさんはどんな活動がしたいですか？」と聞いてくれました。この問いは、本当に嬉しくて、ありがたくて、そして素敵な問いだと思っています。高校生にしてみればやっぱり大学生と一緒に学べるのが楽しみですし、でもどこか大学生に頼りたい、後ろをついていきたいという思いがあったと思います。そこに「あなたたちはどんな活動がしたいのか」と問われたんですね。なかには、「やばい、俺何も考えてなかった」という生徒もいました。もちろん一緒に活動できるので「やったあ」と思った生徒もいました。あらためて「あなたたちはどんな活動がしたいのか」という問いは本当にいい問いだなって思います。一人一人の思いや問題意識を掘り起こす、極めて重要な問いを投げかけてくれたと思っています。心のどこかで「ついていこう」と思っていた生徒たちもこの問いによっていろいろ考え

て参加するようになりました。自分たちが提案したことですから責任を持ってやらなくちゃいけない、そのためには夏休みにも集まって、授業以外にも集まって様々な準備もしていました。



この問いの魔力もありますが、何と云ってもやっぱり大学生のみなさんと一緒に活動できるということが高校生にとってみると魅力なんですよ。それが生徒たちには良い刺激になっていたと思っています。そしてその大学生のみなさんもボランティアコーディネーターのみなさんと同様に「あなたたちは何がしたいの？」という、そういうオーラをいつも出してくれていたのも、高校生たちはそのオーラに乗るように安心して好きなことを言っていたんじゃないかなと思います。そして、それを受け止めている大学生のみなさんの素敵な姿というのがとても印象に残っています。

実は「どんな活動がしたいの」という問いってそう簡単ではありません。そこには様々な要求や提案に対して、それを受け止める懐の深さ・奥行きみたいなものが聖学院の活動にはあったのだと思います。釜石という地域で長期間にわたって活動しているという、そこでいろんな人と知り合って、出会って、このことはこの人に聞いてみようという、しっかりとしたネットワークがあるということがわかってきました。そういうネットワークに基づいてその

奥行きや広さ深さみたいなところが、その問いを生きたものになっているのだと感じました。

聖学院との連携から独自のツアーづくりへ

新井:もう一つ私がこの問いについて印象に残っているのは、「あなたはどんな活動がしたいのか」という問いは生徒だけに向けられたものではないということです。生徒、学生だけでなくそこに参加する全ての人たち、つまり大学の先生や自由の森の教員の私たち自身にも投げかけられているという事が、一緒に活動させていただく中でわかってきました。このツアーで出会った大学の先生たちはそれぞれがテーマを持ってこのツアーに参加しているということがだんだんとわかってきました。今度は「やばい」と思ったのは私です。私自身がこのツアーを通してどんな活動がしたいのかというところが掘り起こされていったと思っています。私たちは何をしたいのかという、どこにどうつなげていきたいのかということ、一緒に参加した自由の森学園の教員ともいろいろと話をしていきました。そこで出された結論が、私たち自由の森学園独自のスタディツアーをつくるということでした。

2019年ごろから自由の森学園の独自ボランティアスタディツアーをつくらうということで準備をはじめました。私たちにとって、「釜石」に変わるものというのは何かということ突き詰めたところ、それは福島県の二本松市の東和地区ということになりました。

私たち自由の森学園は、福島県二本松市東和地区の有機農業グループのみなさんとは長年のお付き合いがありました。1990年代に、その当時は数が少なかった有機農業のお米や野菜を学校食堂に納入してもらっていました。また、1998年からは生徒たちの夏

の体験学習先としてもお世話になっていました。一軒の農家に一人か二人ずつ1週間くらいお世話になり、農業体験だけでなく、農村の伝統的な暮らしも体験させていただいていました。

ところが3.11の東日本大震災と原発事故によってそれが分断というか、断絶されてしまったんです。もちろん卒業生や教員たちは個人的に東和地区の有機農業グループのみなさんとはつながりを持っていました。しかし、学校としては何らつながりを持たずに「断絶」のままの状態でした。そこには原発事故と放射線問題の壁があったと思います。私は当時校長でしたので、何とかしたいという思いが強くありました。この何とかしたいという思いに、背中を押してくれたのが聖学院のみなさんのスタディツアーだったのです。

2019年ごろから準備を始めて2021年、2022年と2回、福島でのスタディツアーを実現することができました。コロナ禍ということもあり、最初は1泊2日、今年度については2泊3日で実施しました。

東日本大震災と原発事故について学んでいくスタディツアーということで、二本松市東和地区だけではなく、隣接する浪江町津島地区の帰還困難区域に行き、現地を視察し、現在も自宅に戻れない方々のお話を聞くことができました。福島第一原発周辺のフィールドワークを行ったり、大熊町に新しくできる義務教育学校の子どもたちと交流したりと活動の幅を広げています。

聖学院大学の優れたスタディツアーの実践というものをベースにしながら私たちは自由の森学園のスタディツアーをつくっています。最初のスタディツアーには生徒と教員だけでなく、有機農産物のつながりから学校食

堂のスタッフにも声かけてツアーに参加してもらいました。生徒だけでなく、学校に関わる大人もまた共に学んでいくということ、これはまさに聖学院大学のスタディツアーに参加して私たち自身が学んできたことの一つだと思っています。

最後に、この2年間私の担当する選択授業をとって、福島スタディツアーと一緒につくってきた生徒の一人が、この4月から聖学院大学に入学することになりました。お世話になりますので、みなさんどうぞよろしくお願いたします。終わります。

平:新井先生、ありがとうございました。外部の方からの貴重なお話を聞かせていただいて、我々も非常に参考になりました。以上をもちまして、第2部を終わりにいたします。ありがとうございました。

総評

若原:こちらのシンポジウムも終了に近づいてまいりました。この書籍には帯がついておりますが、帯に二人の方にメッセージをいただいております。1人は東京ボランティア・市民活動センター所長の山崎先生。そしてもう一方がこの後総評をしていただきます NPO 法人ハンズオン埼玉の西川正さんです。改めましてこの全体を通してのメッセージをいただきたいと思います。西川さんお願いいたします。

西川:皆さんこんにちはハンズオン埼玉という NPO で副代表をしている西川と申します。他に岡山県の真庭市というところの中央図書館の館長をしています。この度は出版おめで

とうございます。本当に色々苦勞があったと思います。出版も苦勞もあると思いますし、10年間の苦勞もあると思います。本当におめでとうございます。本に関しては、帯と60ページの図版を提供させていただいています。

また、ここまでボランティアセンターをきちんと組織の中に位置づけ、職員を採用し、学生とともに歩んでこられた大学の姿勢にあらためて敬意を表します。なかなかできることではないと思います。

今日は総括ということなのですが、そんなことはできませんので、皆さんの話を私はこう聞きました、とフィードバックさせていただいたらなと思っています。一意見としてお聴きくださいなと思います。

自分なんてから自分なりに

西川:この10年間で私自身がボランティア活動支援センターに関わってちょっと印象的だった学生がいます。ある年の春にハンズオンでやったイベントで聖学院の学生さんに来ていただきました。その時は、まだコロナ前だったのですが、マスクをしている学生がたいたんです。どうしてマスクをしてるんだろうと不思議でした。まあ自信がないとか、怖いとかそういう感情で自分を守るということもあるのかなという話をボラセンのコーディネーターの方としたことを覚えています。その学生さんが、秋に団地のイベントにも来てくれた時に、マスクを外していたんですね。では、その半年の間に一体何があったんだろうかということはずっと考えていたのですが、先ほどの第1部、第2部のお話をお聞きしていてその理由がちょっと見えてきたかな、わかったかなという気がしました。

特に第1部のところのボランティアコーディネーターのお二人のお話の中で面白かったのは「アドバイスはしません」と言い切っていたらっしゃることでした。答えを与えるのではなくて、問いかけるのがボラセンなのだと。問いかけて一緒に考える、ということかなと受け取りました。私は遊びの研究をしていますね、遊ぶって必ずこの「答え」がない時にしか生まれないんですね。最初から正解がないという状態でしか面白い時間は生まれないんですね。

一方、「不安を話せる」「何でも聞いてもらえる」とか「涙もたくさん受け止めてもらってました」「やってみたいを待ってくれる」という学生の声もありました。コーディネーターのお二人からも、「呼びかけるけれども、何もしないということもちゃんと認める」という言葉もありました。

これ、つまり、さきほどの「答え」ではなくて、こちらの「応える」ですね。これをコーディネーターのお2人はされていたのではないのでしょうか。

あと評価軸は「本気になれたかどうか」とか「失敗しないで卒業した人はいないよ」ということとかすごく印象的な言葉で、あーなるほどなど、やっぱり「応える」ことによって、安心をちゃんと保障してきたから「やってもいいかな」と本人が思えるようになったんだなということも改めて感じました。先程の学生がマスク外していったことの原因はこれだったのではないかと。

そのことを一言で言葉にしたらどうなるだろうということを考えてつくった一文がこの本の中にある「自分なんてから自分なりに」という一言です。

この20年ほど「個性化」「自分らしく」という

言葉がむしろ流行りでした。その中で結局は「自分なんて」というふうに出てきた学生の皆さんがここに来て、ボランティアをしてみる。いろんな地域の人に関わり、「こんな人もいるんだ」とか「同じ学生なのに自分とは違う感じ方や考え方を持っている人もいるんだ」と。そんな交流を通じて、「自分だったらどうだろう」という問いを繰り返していくうちに「自分らしさ」というよりは、「自分なりに」考えていけばいいんだということに落ち着いてきたのではないのでしょうか。別の言い方をすれば、いろんな人に会うことや、話すことや、一緒に何かをすることに「慣れていく」という感じなのかなと。そんな思いをこめてこの帯の「自分なりに」という言葉にしています。

18歳になった時に、若者たちがマスクをしないと町に出られないような社会を私たちはコロナの前からもうつくってしまっていたんだということを、私たち大人がきちんと受け止めなければいけない。それが今の社会、現実なんだと思います。本当はマスクなんかなくても社会に出て、「私はこれが好きなんです」「こういうことがしたいんです」とちゃんとと言える社会であるべきなのに。そのことに私たち大人は大きな責任を感じなければいけないんだと思っています。マスクをつけなくてもいい社会をみんなでつくっていかなくちゃいけないんだと思うのです。

その時に若い人たちと一緒に考えていくことがとても有効になっていくのではないかなと思っています。じゃあどうしたらそういう社会になるかというのは、簡単に答えがある話ではないと思います。だからこそ、その答えを多分みんなで、若者と模索していくというのがこれからの私たちが一緒にやれることなのかなと思います。

先ほど被災地の話がありましたけど、「被災地に行くと学生たちが成長するんですよ」という話はボラセンの方々に限らず大学の人からよく聞きます。それはなぜかというところから「答え」がないからこそ、人々が相談しあってその日その日のとりあえずの答えを探していく、明日こうしてみようという風に一緒にやってみようということを目の当たりにするからではないでしょうか。答えのないところで人は成長するのだと思います。

一緒にみんなで取り組んでいくと、結果として人は育つ。学生と大学と地域、みんなが育つというのは、同じ問いに取り組んだ時なんじゃないでしょうか。

最後にちょっと一言余計なこと言っておくんですね、私も実は図書館長をしておりますので本に毎日接しています。そして、私も本を出しています。本というのはもうあたかも「答え」であるかのように書いてあるものです。そういう存在なんです。本はすごく重い。「これが答えです」と書かないと本はできないとも言えます。でも最初から答えがあったら面白くないですよ。振り返ってみたら「あー面白い時間だった」ということなんじゃないですか。だから最初から答えがあったりしたらつまらないんですよ。

なので「出版おめでとうございます」と言いながら、本を出して答えがあたかもあるかのような状態というのは非常に危ない状態ともいえます。ですので、「もう本で書いたことなんてもう全然古いですよ」と言って、「新しい聖学院のボランティアセンターは私がやります」という若い人たちが出てきた時に初めて、「お疲れ様でした」と私は先程のコーディネーターの方々に言いたい。そして、それがボランティアセンターの成果だと思います。



あるいは、もっと言えば大学にボランティアセンターなんかなくなったら若者が元気に地域にどんどん出ていけるような社会をみんなでつくっていかなくちゃいけないんじゃないかなと思うので、次のアッシーとかあこちゃんが登場するようなですね、活動をこれからも元気にやっていっていただきたい。そして、20周年の時には違う人が立っているという事ができてたらいいんじゃないでしょうか(笑)

この10年、本当に皆さんお疲れ様でした。また私も一緒にやれることがあったらやりたいと思います。よろしくお願いします。そして出版おめでとうございますということで終わりにしたいと思います。以上です。長くなってすいません。

閉会挨拶

若原: 皆さん長い時間ありがとうございました。この時間までに終わらななきゃダメだという時間もすでに過ぎてしまっていてちょっと焦っています。これは私も含めたボラセンの悪い癖ですね、このシンポジウムもそうですし、普段のスタディツアーなども、やりたいことや伝えたいことがいっぱいあって、ぎゅうぎゅうに盛り込んでしまうんですね。結果、時間オーバーしてしまって申し訳ないんですけども、同じことはこの本を作る時にも言えたのかもし

れません。先ほど川田さんからありましたけれども、この本は 49 人の方にも執筆いただいているんですね。編集する中でこの方にも書いてもらいたい、この卒業生にも書いてもらいたい、という方が本当にたくさん出てきて一つの本が出来上がったということです。そういう点でも、とてもボラセンらしい本になったのかなというふうに思っています。

最後に 1 点だけ、私たちにとっての課題を一つだけお話して終わりたいと思います。この本のタイトルを決めることについても第一部、第二部でお話がありました、メインタイトルの「共に育つ学生×大学×地域」。こちらはすぐにみんなで共有できたのですが、サブタイトルの「人生に響くボランティアコーディネーション」については、我々がやってるボランティアコーディネーションとは何なのか、一言で表すにはどうしたらいいのか、ということでもかなり悩みました。そこで丸山さんが「人生に響く」と言ってくださって、これだと決まったのですが、だけどもあこの「人生に響くボランティアコーディネーション」とは何なのか。これを理論化することを目標に本を作っていたんですけども、実はそこはなかなかうまくいかなかったんですね。けれども、丸山さん

は皆さんに対する「問い」とおっしゃいました。実は我々にとっても問いの段階でもあるということ。もちろん皆さんにたくさん書いていただいたこと、これまでお世話なつた中で一定程度こういうものじゃないかという入り口までは理論化できたと思うんですけども、これをさらに突き詰めていくことが私たちの課題だと思っています。

2 年前からボラセンスタッフと私とで月に 1 回の研究会を開催して、「ボランティアコーディネートとは何か」ということをずっと研究しています。今年度は学内の研究助成もいただいて、関西の大学ボラセンに調査に行ったりしてるんですけども、その研究は引き続き続けていきますので、その成果もまたいつか皆さんにお示したいと思っています。また、これからも皆さんから学ばせていただきたいと思っています。

10 周年という節目を迎えましたが、ボラセンの歩みはまだまだ止まりませんし、これからまだまだ発展していきたいと思っていますので、引き続きよろしくお願いします。本日は本当にどうもありがとうございました。

新入生のボランティア意識調査 —「2022年度新入生アンケート」から—

1. 調査の目的と概要

聖学院大学ボランティア活動支援センターでは、新入生のボランティアへの意識や活動の意向を明らかにすることを目的として、2022年4月にIR課・ボランティア活動支援センター共催でWebアンケートを実施した。

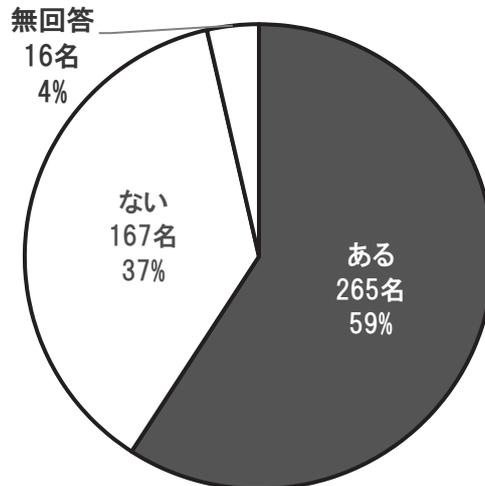
2022年度入学者470名のうち448名から回答を得られた。今後さらに魅力的な活動マッチングや新規プロジェクト立ち上げへの支援などに活かしていくため、ボランティア活動に関連した回答を抜粋し、このアンケート結果を活用する。

2. 調査結果 ※小数点以下は四捨五入で算出

(1) ボランティア活動への関心について

ボランティア活動に関心があると答えた学生は全体の59%（265名）となり、関心がないと回答した学生の37%（167名）を上回る結果となった（図1）。

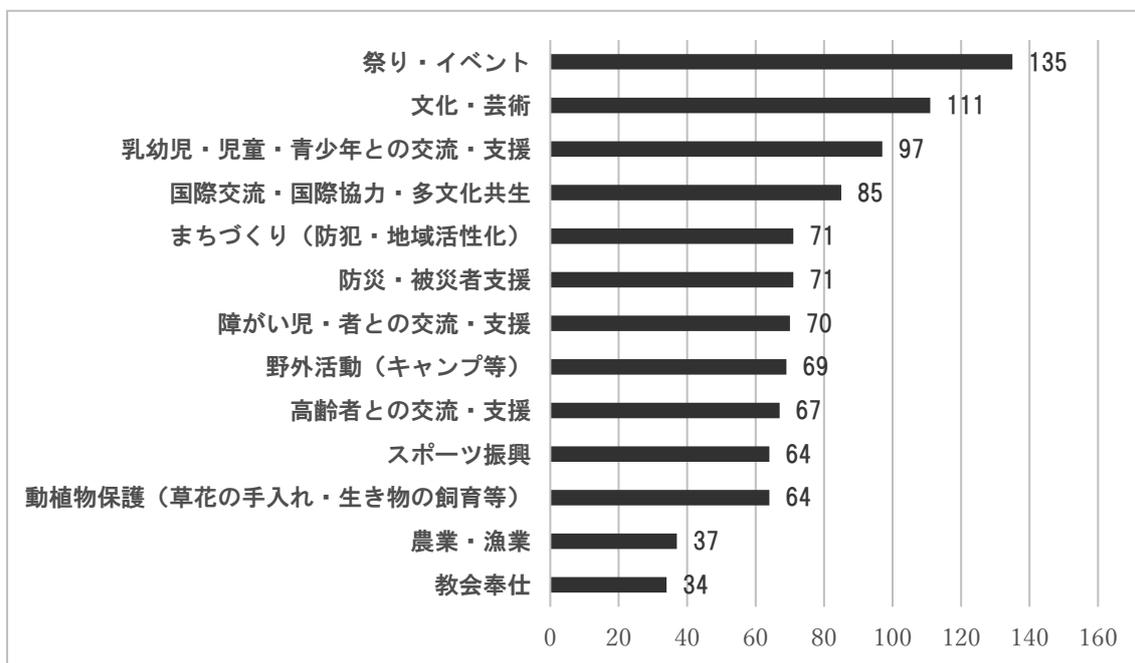
図1. ボランティア活動に関心があるか



(2) 関心があるボランティア活動について

関心があるボランティア活動の分野を複数回答で尋ねたところ（図2）、最も多かったのは「祭り・イベント 135名」で、次に多かったのが「文化・芸術 111名」であった。

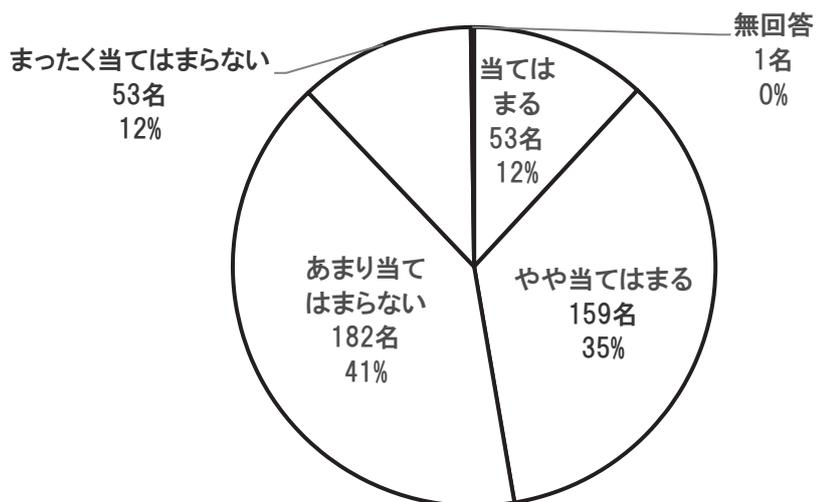
図 2. どのようなボランティア活動に関心があるか(回答者 264 名/複数回答可)



(3) 聖学院大学に入学した理由

入学した理由のうち「ボランティア活動が盛んだから」の回答結果は下図(図 3)となり、「当てはまる」、「やや当てはまる」と回答した学生は全体 47% (212 名) と 5 割近くの新入生が「ボランティアが盛ん」という認識でいることが分かった。

図 3. 入学理由のうち「ボランティアが盛んだから」



センター年間行事一覧(主催・共催・協力事業等)

月	日	概要
2022年4月	6日	第109回センター運営委員会
	12、14、15日	「ボランティア勧誘DAY!!」実施
	28日	「シトラスリボンプロジェクトリボン製作会」実施
5月	11日	第110回センター運営委員会
	14日	「春の東北“オンライン”スタディツアー」実施
	9、10日	「ボランティア・まちづくり活動助成金」応募説明会
	26日	「シトラスリボンプロジェクトリボン製作会」実施
6月	3日	サポメンボランティア企画 「Nice to meet 友Day01」実施
	6日	「学生サポートメンバー養成講座 第1回」実施
	8日	第111回センター運営委員会
	13日	「学生サポートメンバー養成講座 第2回」実施
	18日	「ボランティア・まちづくり活動助成金審査会」実施
	20日	「学生サポートメンバー養成講座 第3回」実施
	23日	「ボランティア・まちづくり活動助成金交付式」実施
	25日	ほたる祭り
	27日	学生サポートメンバー修了式
30日	「シトラスリボンプロジェクトリボン製作会」実施	
7月	1日	サポメンボランティア企画 「Nice to meet 友Day02」実施
	6日	第112回センター運営委員会
	14日	「シトラスリボンプロジェクトリボン製作会」実施
9月	5、6日	「夏の東北“オンライン”スタディツアー」実施
	7日	第113回センター運営委員会
10月	5日	第114回センター運営委員会
	26日	第115回センター運営委員会 「新聞紙エコバックづくりワークショップ」実施
11月	2、3日	「ボラフェス!2022」実施
		「子ども服交歓会@ヴェリタス祭」実施協力

11月	23日	「カランコエの花上映会」共催実施
	29日	「新聞紙エコバックづくりワークショップ」実施
	30日	第 116 回センター運営委員会
12月	6日	サポメン「小さなボラセン 第1回」実施
	15日	サポメン「小さなボラセン 第2回」実施
	19日	「新聞紙エコバックづくりワークショップ」実施
	20日	サポメンボランティアサロン 「ボランティアトークセッション」実施
2023年1月	11日	第 117 回センター運営委員会
	12日	サポメン「小さなボラセン 第3回」実施
	13日	「ボランティア・まちづくり活動助成金報告会」実施
	16日	「引継ぎタイム」実施
	18日	「新聞紙エコバックづくりワークショップ」実施
2月	1日	第 118 回センター運営委員会
	17日	「LGBTQ+に関連した映画感想シェア会」協力実施
	18~20日	「冬の東北ボランティアスタディツアー」実施
3月	1日	第 119 回センター運営委員会 聖学院中学校 LLT 授業協力
	21日	「共に育つ“学生×大学×地域”一人生に響くボランティア コーディネーション」出版記念シンポジウム、 「ボラセン10周年の集い」実施

各事業報告

1. ボランティアプログラム

(1) 学生サポートメンバー養成講座

当センターは「学生と共につくる・育つセンター」として、学生サポートメンバー（通称：サポメン！）の養成に力を入れている。サポメン！は、ボランティアを実践している学生自身が他の学生を巻き込みボランティアのきっかけをつくるとともに、学内外の学生ボランティアを盛り上げるための企画・運営を行う役割が期待されている。そのため、現役サポメン！の協力も得て養成講座を実施し、サポメン！として必要となる考え方や基礎的な知識・技術を体験的に学び、講座終了後に活躍していけるよう支援している。同時に講座を通して、受講生同士・先輩サポメン・コーディネーターとの関係づくりも図っている。

今年度は3年ぶりに対面での講座実施を行った。



第1回「学生サポートメンバーの役割と可能性」

学生サポートメンバーとは何か、また、サポメンと連携するボランティア活動支援センターについて理解を深めた。

日 時：2022年6月6日（月）18:00～20:30

場 所：1号館1 Cafe

参加者：受講生：6名

- 内 容：
- ・ボランティア活動支援センターの役割と願いについて説明
 - ・学生サポートメンバーの役割と可能性について説明
 - ・自己紹介を兼ねたアイスブレイク
 - ・ワーク：ボランティアの一步を踏み出せない理由と対応策を考える



第2回「現役サポメン体験談とアイスブレイク実践」

現役サポメンからサポメンの実際の活動について学んだ後、ともにアイスブレイクを実施し、コミュニケーションを深める場づくりを体験的に学んだ。

日 時：2022年6月13日（月）18:00～20:30

場 所：1号館1 Cafe

参加者：受講生：4名、現役サポメン：3名

- 内 容：
- ・現役サポメンに聞く「サポメンの役割とやりがい」体験談
 - ・みんなでアイスブレイク
 - ー現サポメン進行によるアイスブレイク
 - ーアイスブレイクについての解説



ーワーク：チームに分かれてアイスブレイクの進行をやる

第3回「学内外のボランティア活動を知る」

「ボランティア・まちづくり活動助成事業公開審査会」の運営をサポートしながら、学内外のボランティア活動のプレゼンテーションを聞いた。

日 時：2022年6月18日(土)12:00~17:00

場 所：4号館4401教室

参加者：受講生：3名

第4回「リーダーシップとフォロワーシップを学ぶ」

リーダーシップとフォロワーシップについての理解を深め、今後のサポメンの取り組みについて話し合いを行った。

日 時：2022年6月20日(月)18:00~20:30

場 所：1号館1Cafe

参加者：受講生：5名、現役サポメン：2名

内 容：・「ボランティア・まちづくり活動助成事業公開審査会」振り返り

・リーダーシップとシェアードリーダーシップについての講義

・ワーク：自分なりのリーダー像を考える

・現サポメンと一緒に、サポメンとして取り組みたいことを話し合う



成果と課題

・コロナ禍で出来るボランティア活動が少ない中、熱心に取り組んでいる学生たちの出会いの場になったことが一番の収穫だった。周りに理解者を見つけられずにいた学生ボランティアたちが仲間を得て、「意識高い系などと言われずに、やりたいボランティアを普通にできる環境をつくりたい！」と一致団結する様子が素敵だった。

・「ボランティアの一步を踏み出すため」受講生から提案された企画の中には、すでに実施されているものもあり、学生たちに知られていないことに課題を感じる一方、学生目線でニーズを訴える積極的な姿勢に、今後の新しい展開を感じた。

・「ボランティアを普通にできる環境を実現したい」と望む学生たちの想いを大切に、この勢いを次につなげていきたい。

(2)復興支援ボランティア事業

聖学院大学では、2011年3月11日に起きた東日本大震災

以降、継続的に被災地の復興支援活動（復興支援ボランティアスタディツアー等）を行ってきた。2020年から新型コロナウイルス感染拡大により対面での活動が一度はすべて中止



となったが、今年度は大学としての活動制限ガイドラインも鑑みながら、状況に応じオンライン・対面でのそれぞれの実施形態を取った。また、企画運営を行うプロジェクトリーダーとして学内有志団体リアスのメンバーや一般学生から有志を募り、週 1~2 に 1 回ペースで企画会議を設け企画を進めた。

i)春の東北“オンライン”スタディツアー

昨年度に引き続き、オンラインを活用したスタディツアーを実施した。東日本大震災への学びや現地の方々とのつながりを感じるとともに、次なる災害に備える防災知識の向上を図ることを目的とした。

日 時：2022 年 5 月 14 日(土)13:00~16:00

オンライン開催 (Zoom)

共 催：聖学院大学学生有志 (プロジェクトリーダー)、リアス

参加者：学生 14 名 (内、プロジェクトリーダー7 名)、教職員 9 名、卒業生 1 名
計 24 名

ゲスト：只野哲也さん、今野憲人さん、佐藤涼介さん (Team 大川-未来を拓くネットワーク-)、菅野雄大さん (卒業生)

内 容：

—「Team 大川-未来を拓くネットワーク×リアス 未来を拓く対談」

東日本大震災で津波に襲われ 74 名の児童、10 名の教職員が亡くなった石巻市震災遺構大川小学校の卒業生等で構成された Team 大川-未来を拓くネットワーク-の只野哲也さん、今野憲人さん、佐藤涼介さんにオンラインで登壇いただき、それぞれの視点で震災前から震災後の大川小学校や地域について対談形式でお話を伺った。

—「学生交流企画」

震災という切り口だけでなく東北の地域としての魅力も感じて欲しいというプロジェクトリーダーの願いから、自由参加の交流会を行った。参加者には東北の逸品として「鯨の大和煮」を事前に渡し、オンラインで繋がりながら一緒に味わった。

—「どれだけ揃う？防災グッズ借り物競争！」

宮城県出身の卒業生で在学中に復興支援ボランティア団体を立ち上げた菅野雄大さんをゲストに迎え、「どれだけ揃う？防災グッズ借り物競争！」と題した参加型の防災グッズ紹介プログラムを行った。

—ツアー全体の振り返り

成果と課題

・学生と同世代である Team 大川-未来を拓くネットワーク-の皆さんに登壇いただき、団体という枠を超えて繋がりを持って、今後に繋がる想いをベースにした協働関係の基礎となった。

- 人の温度感や楽しい雰囲気や伝わりづらさなどのオンラインイベントでぶつかる壁について、プロジェクトリーダーと事前に検討できたことで参加者を巻き込んだ飽きないプログラムを展開できた。

《参加者の感想》

- 被災地は悲しい場所だけではなく、思い出が沢山溜まった場所。なにか自分にできることはないか?と思ったら、東北に限らず、現地に足を運んで一緒に考えることも私たちができることのひとつだと伝えたい。
- テレビで見る映像と、目の前で見る景色というものは天と地ほどの差があると感じました。震災のことばかり注目されてしまうけど(そこも重要ではありますが)もっとこういう魅力のある町で、こんなにいっぱい素敵なものに溢れている、ということ発信してくことはとても大切だと感じました。小学生 5 年生でも死を感じる、覚悟するという言葉に胸を打たれました。その恐怖や不安は計り知れないと感じました。(プロジェクトリーダー)
- 防災グッズの紹介をゲーム方式にしたことによって今家に何があるのかをしっかりと確認することができたし、時間内に取って来られなかったものはもっとすぐ取れる場所に移動させなければいけないなということを考えることができたためとてもよかったと思います。



ii)夏の東北“オンライン”スタディツアー

企画運営を行うプロジェクトリーダーのみ現地入りし、現地からオンラインで中継を行う形で 2 日間のツアーを実施した。東日本大震災への学びや現地の方々とのつながりを感じることで、また地域の魅力発見を目的とした。

日 時：2022 年 9 月 5 日(月) 13:30~17:00、9 月 6 日(火) 10:00~13:30

オンライン開催 (Zoom)

共 催：聖学院大学学生有志 (プロジェクトリーダー)

参加者：学生 12 名 (内、プロジェクトリーダー 4 名)、教職員 9 名、卒業生 3 名
計 24 名

ゲスト：只野哲也さん、佐藤周作さん (Team 大川-未来を拓くネットワーク)
武内宏之さん (みやぎ東日本大震災津波伝承館)
犬塚恵介さん (合同会社くらしごと)

内 容：

《1日目》

―「石巻市震災遺構大川小学校と私たちの未来をひらく」

春のツアーでも登壇いただいた Team 大川-未来を拓くネットワークの只野哲也さんに生中継で大川小学校を案内していただきながら、震災前の大川小学校と地域のこと、震災当日に起きたこと、そして Team 大川-未来を拓くネットワークの願いを語っていただいた。その後グループに分かれ、①「自分の未来をひらくためにできること」、②「大川小学校の未来をひらくためにできること」を参加者と Team 大川のメンバーと共にシェアした。

《2日目》

「東北の土地の魅力や人に触れる」をテーマに、現地入りしたプロジェクトリーダーが「陸組」と「島組」の二手に分かれ、それぞれの場所からオンライン参加者に向けて生中継や事前録画したものの配信を行った。

―「日和山公園の紹介」

発災当時、多くの方々が津波から避難し命の山と呼ばれた石巻のシンボルである日和山公園を、町を見渡す映像と共に紹介した。

―「東北の魅力発見①」

石巻市内の港からフェリーで 40 分に位置する田代島を紹介として、人より猫の方が多いいことから猫島とも呼ばれていることや、穏やかな海の様子を配信した。また、観光客向けの休憩所「島のえき」を運営する、合同会社くらしごとの犬塚恵介さんに震災当時からこれまでの歩みや、島の魅力についてインタビュー形式で語っていただいた。

―「東北の魅力発見②」

石巻の豊かな海の幸や加工品を売る市場からの生中継や、名物料理の食レポなども交えながら、食の魅力を紹介した。また、参加者に事前に渡していた「金華サバの缶詰」と「石巻産ササニシキのパックご飯」を共に味わった。

―「武内宏之さんのインタビュー」

現在みやぎ東日本大震災津波伝承館で語り部をされており、震災当時壁新聞の作成に携わった武内宏之さんに参加者からの質問・コメントも交えながらインタビューをした。

―ツアー全体の振り返り

成果と課題

- ・プロジェクトリーダーが現地入りできたことで、厚みと実感の伴う発信をすることができた。
- ・「未来をひらく」をテーマに、Team 大川-未来を拓くネットワークの皆さんと“一緒に考える”ことができたことで、今後の活動へと繋がっていく時間となった。

《参加者の感想》

- ・震災のことを深く知る事ができ、自分自身の学びへと繋がるだけではなく、石巻が元々持っている明るい面や魅力を知ることができた。
- ・東日本大震災を地震や津波というキーワードだけで終わらせず、今動いてること、現地の人々の今の想いに触れることが出来、変わりゆく東日本大震災との向き合い方について考えられました。
- ・グループワークすることで、自分では思いつかなかった意見を共有することが出来ました。東北に私たちができることは沢山あるのだと皆さんの意見を聞いて思いました。この意見を元に、様々な活動が出来たらいいなと思いました。



iii) 冬の東北ボランティアスタディツアー

3年ぶりに対面バスツアー形式で実施した。感染症拡大対策として移動時のバスは定員の1/2とし、宿泊は個室とした。宮城県石巻市を訪れ、東日本大震災への学びや現地の方々とのつながりを感じることに、また地域の魅力発見を目的とした。

日 時：2023年2月18日(土)～20日(月)

共 催：聖学院大学学生有志（プロジェクトリーダー）

協 力：Team 大川-未来を拓くネットワーク

参加者：学生17名（内、プロジェクトリーダー3名）、教職員8名 計25名

内 容：

《1日目》

— みやぎ東日本大震災津波伝承館のガイド付き見学

— 石巻南浜津波復興祈念公園の見学

— 石巻市震災遺構門脇小学校のガイド付き見学

《2日目》

— Team 大川-未来を拓くネットワークによる、石巻市震災遺構大川小学校のガイド付き見学

— 聖学院大学×チーム大川交流プロジェクト：「Team 大川と一緒に、大川小学校や周辺地域の“未来をひらく”のために自分たちにできることは何か？を考える。」

— ツアー全体の振り返り

《3日目》

一女川駅前（シーパルピア女川等）を観光・震災遺構見学

—いしのまき元気いちばの観光・自由昼食

成果と課題

- ・感染症対策として参加人数は半数に押さえていたものの、3年ぶりに現地に出向くツアーを実施し、初めて東北に出向く学生もいる中で、震災がどんなものであったかということやこの12年間の歩みについて、語り部一人一人から語られる言葉を通して知り、考える時間であった。
- ・対面することでしか得られない、現地団体との濃密な議論の時間を持つことができた。
- ・復興支援という形から、現地のコミュニティの再構築といった議論に及び、次回のツアーに繋がるような時間となった。

《参加者の感想》

- ・伝承館での説明を聞いた際、建物の構造、中身、展示、説明をしてくださった方、その全てが伝承に徹していることを感じました。説明をしてくださった方も、もちろん震災を経験している方で、その方が辛さも込みで伝えてくださるからこそ、今私はこの場所で何ができるのか考える場所を与えられている。そう実感し、気が引き締められました。
- ・震災当時に起こったことが赤裸々に語られて頭にガツンとくるような衝撃を受けました。なぜ知らなかったのだろうと言う気持ちとどうして目を背けていたのだろうと言う気持ちがありました。とても貴重なお話を聞き、できることをすること、想いを大切に自分でできることを見つける手がかりになりました。
- ・意見交換や、交流では、今回のツアーの目的に近い“自分には何ができるか、どう考えているか”それを口に出して人に伝えることが出来たと感じました。実際に活動されている方との会話はすごく有意義であり、これからの学生生活に組み込みながら関わっていく上で大切なことを学ぶことが出来たように思います。また、自分の考えを口に出し、相手からの肯定が得られた時もありました。長いようで短い時間だったなとすごく思うほど、沢山思考しながら話をしたなと感じます。やりたいこと、やらなければと感じたことが増えたと感じられたためです。





iv) 釜石「キッズかけっこ教室」

本学では 2018 年度より、社会福祉法人愛泉会かまいしこども園の園児を対象とした「キッズかけっこ教室」を陸上競技部とボランティア活動支援センターの共催により実施している。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止となった。



(3) 学内ボランティアプログラム

i) シトラスリボンプロジェクト リボン製作会

「シトラスリボンプロジェクト」は、新型コロナウイルス感染症による誹謗中傷や差別をなくそう、「ただいま、おかえり」と言い合える優しいまちでありますようにという願いを込め、愛媛県内で生まれたプロジェクトで、埼玉県内でも取り組みが広がっている。学生がこの活動に協力するきっかけづくりとして、上尾市内でシトラスリボンの輪を広げている『シトラスリボンプロジェクト IN さいたま』と連携し、学内にて定期的にリボン製作会を実施した。



開催日時と参加者数：

第1回	2022年4月28日(木)12:20~12:55	11名
第2回	2022年5月26日(木)12:20~12:55	11名
第3回	2022年6月30日(木)12:20~12:55	10名
第4回	2022年7月14日(木)12:20~12:55	4名

のべ 学生 36名

全て対面開催

- 内 容：
- ・活動の説明
 - ・自己紹介／アイスブレイク
 - ・シトラスリボンの製作



成果と課題

コロナ禍で学生の対面課外活動の制限がある中、学内で気軽に参加できる活動として、ボランティア活動が初めての学生や、就職活動中の学生が息抜きがてら参加し、学生間の交流の場としても機能した。

ii)新聞紙エコバックづくりワークショップ



シトラスリボンプロジェクトの活動終了を受けて、引き続き学内で取り組めるボラティア活動を学生サポートメンバーと検討。プラスチックバッグの利用を見直すきっかけとして新聞紙エコバッグを学園祭で配布することを目的に月1回程度製作会を実施した。

開催日時：

第1回	10月26日(水)12:15~12:55	7名
第2回	11月29日(火)12:15~12:55	3名
第3回	12月14日(水)12:15~12:55	3名
第4回	12月19日(月)12:15~12:55	4名
第5回	2023年1月18日(水)12:15~12:55	2名



全て対面実施

参加者数：のべ学生19名

内容：・活動の説明、自己紹介を兼ねたアイスブレイク
・新聞紙エコバッグの製作

成果と課題

- ・学園祭の際に実施したボラフェスで、福祉施設で作られた製品などを購入されていく来場者に新聞紙エコバッグを配布したところ大変好評だった。今年度、学園祭以降に作成したものは来年度の学園祭で配布できればと思う。
- ・実施してみると、学外で活動する時間をつくるのが難しい学生や、まずは学内で交流できる活動に参加したいといった学生のニーズがあることが分かった。来年度も月1ペースで学生の参加状況を見ながら続けていきたい。

(4)視野を広げるボランティア教養講座・プログラムの実施



社会の課題と向き合うための教養講座を実施し、学生たちとともに社会の諸問題と向き合い、学ぶ機会を持っている。

i)『カラコエの花』上映会&感想シェア会



無理解により無意識に行った行為が、相手にとっては心に傷を負う行為になってしまうことがある。差別のない誰もが過ごしやすい社会への実現に向け、性の多様性やより良い「生き方」「在り方」について考え、話し合える場をつくることを目的に、有志による学生実行委員とボランティア活動支援センターの共催で映画上映会を実施した。

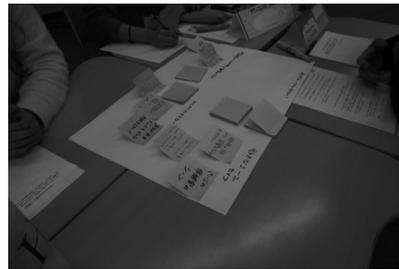
日時：2022年11月23日(水)10:40~12:10

場所：4402教室

共 催：「カランコエの花」上映実行委員会
 対 象：聖学院大学全学生、教職員
 参加者：学生 22 名、教職員 10 名 計 32 名
 内 容：・スタッフ紹介
 ・映画「カランコエの花」鑑賞（40 分）
 ・参加者による感想シェア会（50 分）

成果と課題

意参加者アンケートによると、「映画を見て、いろいろ感じたところがあったので、その後、意見交換できてよかった」など、映画の内容・感想シェア会ともに、大変好評だった。また、ほぼ全員が「今後も LGBTQ に関する企画に参加したい」と回答し、ニーズを感じる。一方、参加者はもともと LGBTQ に対する差別意識がない人が多く、「いい意味で」認識に変化がないことがわかった。LGBTQ について正しい知識がない人こそ参加してほしいが、どうしたら参加してもらえるかが、今後の課題と思われる。



ii)LGBTQ+に関連した映画感想シェア会

「カランコエの花」上映会に参加した教員より LGBTQ+ に関連した映画 DVD の提供があり、学生グループ「ジェンダー勉強会」と共催で2回に渡り映画鑑賞会を実施した。その後、学生の働きかけにより教員を招き、お互いの問題意識を確認したり、ジェンダーに関する勉強のテーマを見つけるきっかけの場をつくることを目的とした感想シェア会を実施した。

共 催：学生グループ「ジェンダー勉強会」
 対 象：「カランコエの花」上映実行委員会（学生スタッフ）
 日 時：2023 年 2 月 17 日(金) 15:30~18:10 1 号館 2 階 1202 教室
 ゲスト：欧米文化学科 氏家理恵教授
 参加者：学生 7 名、職員 3 名

内 容：LGBTQ に関連した映画について、氏家教授から解説や時代背景等を聞いた後、それぞれ鑑賞した感想や意見を交換した。

取り上げた映画：

- ・「セルロイド☆クローゼット」（1995 年のアメリカ合衆国のドキュメンタリー映画）



- ・「パレードへようこそ」(1980年代英国サッチャー政権下で起きた、炭鉱労働者たちとゲイの若者たちの共闘物語)

成果と課題

《参加者の感想》

- ・氏家先生を囲んで、映画2作をメインに意見交換したがそれ以上に60年代～今に至る迄の歴史や、変遷を知る事が出来たのはとても有意義だった。間違った知識や時代の流れに巻き込まれて、理由もなく排除したり否定的な態度を取っていたのだと改めて知る事が出来た。
- ・LGBTQだけでなく、女性、黒人、障害のある方、高齢の方、様々な人々へ向けた差別観というものも沢山あることを知れました。その差別観を少しでも和らげるために、緩やかにでも少なくなるように、するためにどうしたらいいか考えなくてはと強く感じました。さらに、その事を考え続けることも十分に大切ですが、それだけでなく、なにか行動を起こすことも重要なのではないかと改めて感じました。
- ・会の中で紹介があったインクルーシブ・ディレクターの仕事は演じる俳優さんの偏った考え方や、差別的な表現を正す事が出来ると感じた。今後も、同性愛を取り上げた映画やその他作品に当事者が監修に入ったり、ディレクターが入るなどする事でよりリアルになっていくと感じた。



iii)あかかふえ未来会議クリスマスプレゼント企画

タイ北部の経済的な理由で学ぶことが困難だったり、無国籍であることから進学や就職を制限されてしまったりしている山岳民族の子どもたちに、クリスマスカードや文房具などのプレゼントを届ける企画を実施した。実施にあたっては、山岳民族の子ども達の支援を行うあかかふえ未来会議、アプアリ友の会との共催で実施した。

共 催：あかかふえ未来会議／アプアリ友の会

受付期間：11月30日(水)～12月14日(水)

参加者：学生：3名



2. 学生サポートメンバー（サポメン！）との連携

学生サポートメンバー（通称：サポメン！）は、聖学院大学におけるボランティアの活性化を目的として組織され、今年度はサポメン 8 期生から 11 期生を中心に自分たちでできる活動を実施している。本年度は、新たに学生が多く出入りするところにボランティア募集のチラシ式を気軽に持っていくことができるボランティアチラシセットのラック設置や、食堂の出入り口でボランティア活動を紹介する「小さなボラセン」といった新たな企画が生まれた。



(1) サポメン！ミーティング

毎週 1 回昼休み、企画に応じて随時ミーティングを行った。基本は対面実施し、学生の希望に応じてハイブリットでも実施した。

(2) ボランティア勧誘 DAY!!

例年、新入生に向けた学内外のボランティア団体紹介イベントを、サポメン！と共に実施している。今年度は新型コロナウイルス感染症対策として野外で、3 日間開催した。

日 時：2022 年 4 月 12 日(火)、14 日(木)、15 日(金) 12:10~13:00

対面開催（1 号館前芝生広場）

参加者：ボランティア団体：7 団体（のべ 47 名）、来場学生：のべ 42 名 計 89 名

参加団体：あそび場オンラインプロジェクト、防犯ボランティアチーム STOP、ゆーはび

♣️ いろとりどり ♣️、防災戦隊マモルンジャー、リアス、Petite Arche

成果と課題

- 3 年ぶりに対面活動が概ね復活し、本来の活気を取り戻しつつある中での開催となったこともあり、コロナ禍で入学した 2、3 年生の参加も目立ち、交流を楽しむ姿が印象的であった。この 1、2 年思うように動けなかった学生も多そうなので、ひとりでも多くの学生が活動参加につながるよう、多様な活動プログラムを紹介するなど盛り上げていきたい。
- 1 年生からは、授業に慣れてから団体への加入を検討したいといった声が多くあった。様子を見ながらフォローしていきたい。



(3) サポメンボランティア企画「Nice to meet 友」

気軽なコミュニケーションゲーム（アイスブレイク）を紹介し、学生同士の友達作りを応援することと、ボランティア活動に関心を持ってもらうきっかけとして交流企画を実施した。

第1回

日時：2022年6月3日(金)12:15~12:55 対面開催(1201教室)

参加者：学生7名(サポメン：3名、一般参加学生：4名)

内容：

- ・サポメン!によるアイスブレイク「ウソ?ホント?自己紹介ゲーム」の実施
- ・サポメン!が所属するボランティア団体やセンターで取り扱うボランティア募集の案内

成果と課題：

- ・ボランティアを前面に出さない交流イベントがあると、つながりが持ちやすいと感じる。
- ・サポメン養成講座で学ぶアイスブレイクをサポメンが実践する機会にもなった。

第2回

日時：2022年7月1日(金)12:15~12:55

対面開催(1201教室)

参加者：学生13名(サポメン：7名、

一般参加学生：6名)、教員1名、スタッフ3名

内容：

- ・サポメン!によるアイスブレイク「どっちがいい?みんなで教室合戦!」の実施
- ・サポメン!が所属するボランティア団体やセンターで取り扱うボランティア募集の案内

成果と課題：

- ・「普段、人とあまり話をすることがなく、先輩や同級生と話せて楽しかった」「他学科の人とも話が来て、とても面白かった」「正解の無い問いを、みんなで考えて議論するのが面白かった」など、アイスブレイクを活かして楽しい場づくりが出来たことを伺える回答が寄せられた。サポメンも達成感を感じられた様子だった。
- ・学内で気軽に参加し、一緒に活動できる作業系のボランティアの人気の高いので、新たに始められることはないか、サポメンとともに検討していきたい。



(4)小さなボラセン

「ボランティアに興味はあるけど、ボラセンに行くのはハードルが高い…」という学生のために、立ち寄りやすい場所に、サポメンによる出張ボラセンを開催。興味を持って立ち止まった学生が、ボランティア経験のある学生と気軽におしゃべりし、ボランティア活動を知ってもらおうきっかけの場として実施した。

開催日時と実施場所：

第1回目：2022年12月6日(火)12:10~13:00

第2回目：2022年12月15日(木)12:10~13:00

第3回目：2023年1月12日(木)12:10~12:45

対面開催(第1回目・第2回目：4号館1階食堂前/第3回目：エルピス館2階)

参加者：サポメン：4名

内 容：サポメンが作成した「ボランティア診断チラシ」と「活動紹介リーフレット」とアンケートを配布。いろいろな分野のおすすめのボランティア情報を長机に並べて、自由に手に取れるようにした。

成果と課題

- 学生が作成した「ボランティア診断チラシ」が特に関心を引いたことにより、多くの学生がチラシを受け取ってくれた。また、サポメンの知り合いや友達が立ち止まることもあり、これまでボラセンに来室したことのない学生と知り合うことができた。学生目線で生まれた素晴らしい企画で手ごたえを感じる。
- 課題としては、割合としては立ち止まる学生が少ないこと、サポメンは自分のボランティア活動以外は詳しくないので相談に乗れないことなどから、モチベーションが落ちてしまうことが懸念される。サポメンきっかけでボランティア活動につながったケースのフィードバックなどをまめに行って、サポメンが達成感を感じる活動になるよう心がけたい。



(5)サポメン！ボランティアサロン

サポメン！からの「ボランティア活動をしている学生個人の想いを聞き、もっと深く知り合える場を、少人数でいいので対面中心で作りたい」という提案から、サポメン！が自分の活動に対する想いを語る連続企画として実施した。

日 時：2022年12月20日(火)17:00～19:00 対面開催（1cafe）

進 行：金久保仁（児童学科4年、サポメン！）

ゲスト：新井乾斗（政治経済学科4年、Petite Arche 元代表）

参加者：学生10名（サポメン：1名、一般参加学生：9名）、教職員5名、外部1名、コーディネーター1名 計16名

内 容：前半は現在ボランティアリーダーとして活躍する学生2人がなぜボランティアに参加したのか、ボランティア団体の運営の楽しさや難しさを想いのままに語り、後半は登壇者と参加者で感想のシェアや来年の抱負を語る時間を持った。

成果と課題

- 参加者からは「先輩方の話を聞いて、自分ももっと頑張ろうと思った」、「先輩も活動で悩むことがあると聞いて、少し安心した」といった感想があった。現在ボランティア活動に取り組む学生や、団体をこれから運営する立場になる学生がエンパワメントされる時間となった。



3. 学内ボランティア団体の育成支援

(1) 団体の活動・運営支援

センターでは個人のボランティア相談のほかに、団体の活動相談にも応じている。活動に関するアドバイスや役立つ情報の提供に限らず、必要に応じてファシリテーターとして団体の会議に出向いたり、外部団体とのマッチング等もしている。

主な相談内容：

- ・組織運営や世代交代引継ぎに関すること
- ・メンバー間のコミュニケーションに関すること
- ・メンバーのモチベーションアップに関すること
- ・新入生の巻き込み方
- ・広報に関すること
- ・具体的な活動内容の相談
- ・地域の連携団体や活動先について
- ・オンライン活用のノウハウについて など



(2) 団体の立ち上げ支援

個人ボランティアとして子ども支援の現場で活動を行ってきた学生が、その活動先での活動の活性化を目的に、新たに「ゆーはぴ」という団体を立ち上げることになった。立ち上げにあたり、活動目的の整理、メンバー募集や最初の顔合わせなど走り出しを支援した。



(3) 活動継続支援

コロナ禍で活動の機会が失われたことで、多くの団体がメンバー募集に苦戦した。現メンバーは4年生だけ、もしくは実習期間に入る3年生だけという、今年度新メンバーが集まらなければ解散、もしくは活動休止の決断をしなければならない団体もあった。そのような状況にあった、「防犯パトロール STOP!」より、活動に関心のある学生に話をする機会をつくりたいとの相談を行って、説明会やマッチング、新メンバーだけで活動を始められるようなフォローを丁寧に行ったが、今回は活動継続にはつながらず、休止となった。



(4) 引継ぎタイムの実施

学内で活動する学生ボランティア団体は、以前より先輩から後輩への引継ぎやフォローアップが十分に行えずに団体運営に支障が出たり、新型コロナウイルス感染拡大の影響で団体の存続も困難な状況に陥っているケース等



が散見されていた。昨年度より、学生たちが自ら活動を見直し効果的かつエンパワメントに繋がる場として、「引継ぎタイム」を実施した。以下を狙いとしている。

- ボランティア活動に関わる学生一人一人のエンパワメント
- 失敗しても大丈夫だという安心感の醸成
- 引継ぎの重要性を認識する
- そもそも引き継ぐとはどういうことかを具体的にイメージできるようにする

日 時：2023年1月16日(月)18:00~20:30 対面（1Cafe）開催

参加者：29名（8団体）

対 象：ボランティア活動支援センターで支援をしているボランティア団体全般

内 容：①所長より開会挨拶・引継ぎの意義とは

②「卒業生に聞いてみた！引継ぎのあんなこと、こんなこと」報告

▶ 課外活動を行っていた卒業生を対象に実施した事前アンケートの報告

③ワークⅠ「引き継ぐこと・引き継ぎたいことの洗い出し」

▶ 何を引き継ぐのか、また引き継ぎたいのかについてグループワーク

▶ “引継ぎリスト”の項目を作成

④ワークⅡ「“引継ぎリスト”に基づく引継ぎの共有」

▶ 同一団体の先輩・後輩でグループに分かれ、“引継ぎリスト”を埋める

⑤感想のシェアとアンケート

成果と課題

- 昨年度より始めた試みであったが、引継ぎの重要性への気づきのみならず、引き継ぐ先輩にとっては活動を振り返る時間としても機能し、また後輩にとっては活動を担っていく自覚を持つ一つのきっかけにもなった。
- 対面実施できたことで、コロナ禍で減少傾向にあった雑談や学生同士の交流機会の大切さに気付くきっかけにもなった。
- 参加学生の反応から、センターに求められているのは〈先輩世代と後輩世代が安心して対話できる場づくり〉、〈効率的かつ効果的な話ができるような枠組み整理の手伝い〉、〈分からなくてもよい、失敗してもよい、という保証機能〉等であることが伺えた。



4. 学生ボランティア団体サポート制度

(1) ボランティア・まちづくり活動助成事業

i) ボランティア・まちづくり活動助成事業

活発にボランティア活動に取り組む学生が一人でも増えること、助成金申請を通して、自分たちの「伝える力=プレゼン力や事業計画づくり」を磨くとともに、地域の方々や先輩・教職員等多くの人が応援していることを実感すること、さらに、地域の方々に学生の取り組みについて知っていただくことを目的として実施している。また本事業はボランティアグループに限らず、教育活動の一環として地域貢献にかかわるゼミについても本助成金の活用が広がるよう推進している。実施にあたっては本学同窓会と共催し、学生たちへの助成金 30 万円の支援をいただいた。

2019 年度から上尾社会福祉協議会に協力いただき、地元上尾市で活動する団体を対象に、赤い羽根共同募金からの助成金を受けられることができる取り組みも行っている。街頭赤い羽根の街頭募金活動に参加経験のある小・中学生が審査員になることで、より地域に根差した視点や地域から応援されている実感を持って活動に取り組んでもらう機会となっている。

今年度は新型コロナウイルス感染症のため、公開審査会の際に来場者が任意で学生を直接応援できる「ドネーションパーティー」については中止し、学内教職員のみ寄付を募った。

また、昨年度 7 年目を迎えた本事業について検討小委員会を立ち上げ在り方について検討を行い、今年度から初めて申請する団体もしくは前回申請から 1 年以上経っている団体に対して【チャレンジ助成】枠を設け、さらに公開審査会の審査方法の変更を行った。

共 催：聖学院大学同窓会、上尾市社会福祉協議会



実施スケジュール

日にち	実施内容
5月9日(月)、 10日(火)	〈説明会兼研修会〉 応募を予定している学生グループを対象に応募概要の説明を行った。
6月8日(水)～ 10日(金)	〈公開審査会リハーサル〉 申請団体を対象に審査会本番を想定して発表練習の時間を持った。
6月18日(土)	〈公開審査会〉 第一次審査では、申請団体のプレゼンテーションと書類をもとに審査を行い、ポイント数によって助成金交付の有無と交付額を決定。同窓会からの助成金については審査員と学生審査員（各申請団体）が審査し交付の有無を、赤い羽根助成金については小・中学生審査員が審査し交付額を決定した。 第二次審査会では、同窓会からの助成金交付決定団体への助成額を、獲得ポイントを参考に審査員で話し合い、決定した。

6月23日(木)	〈助成金交付式〉 同窓会からの助成金、赤い羽根助成金交付団体に対して、助成金の交付を行った。また、助成金の使用用途や報告書類の記入方法について説明を行った。
2023年 1月13日(金)	〈活動報告会〉 助成金交付団体による活動報告会を実施し、審査員が参加した。審査員には各活動について講評をいただき、後日、交付団体へのフィードバックを行った。

公開審査会審査員

NO	選出枠	肩書	氏名（敬称略）
1	大学同窓会	聖学院大学同窓会 副会長	大川愛加
2	ボランティア応援卒業生	ふじみ野市立児童発達支援センター 児童指導員	中島結女
3	地域の方	上尾市ボランティア連絡会会長	本城文夫
4	地域の方	さいたま北商工協同組合 副理事長	新井一年
5	専門家（NPO 関係）	NPO 街のひろば理事長	松浦康介
6	専門家（ボランティア関係）	社会福祉法人上尾市社会福祉協議会上尾市ボランティアセンター	岡田淳一
7	大学	ボランティア活動支援センター／地域連携・教育センター所長	若原幸範
8	大学	サステイナビリティ推進センター所長	西海洋志

赤い羽根審査員 | 赤い羽根共同募金活動経験者である上尾市内の小・中学校の生徒7名

申請内容と助成決定額

団体名	事業名	所属人数	申請額	決定額	赤い羽根助成額	寄付金	合計
●いろいろとどろ●	子育て支援プロジェクト	16	47,650円	47,000円	5,000円	2,000円	54,000円
あそび場オンラインプロジェクト	あそび場オンラインプロジェクト	8	38,300円	26,000円	6,000円	2,000円	34,000円
防災戦隊ママルンジャー	命を守るんじゃーショー	6	50,000円	50,000円	6,500円	2,000円	58,500円
U.D.I.	U.D.I.とNPO法人みみのり協働による地域活性化プロジェクト	14	50,000円	5,000円	2,500円	3,000円	10,500円
Petite Arche 野菜・ゴミプロジェクト	Project GUNOI&FARM (グノイ&ファーム) ~野菜・ゴミ編~	22	50,000円	35,000円	6,500円	2,000円	43,500円
手話同好会しゅわっち	障害のある人もない人も共存できる世界を	16	30,000円	30,000円	5,500円	2,000円	37,500円
Petite Arche 古着プロジェクト	Petite Arche 流 SDGs ライフハック~野菜編・ゴミ分別編~	11	30,000円	30,000円	3,000円	2,000円	35,000円
チーム防災教室	楽しく学ぼう！~命の守り方~	5	32,900円	15,000円		5,000円	20,000円
チームリアス	未来を拓く活動	12	30,000円	15,000円		2,000円	17,000円
ゆーはび	学びの基礎は遊びから	12	30,000円	21,000円		2,000円	23,000円
茶道部	杉戸町でお手前プロジェクト	14	30,000円	21,000円		2,000円	23,000円
ボランティア実践論	交流会	6	30,000円	5,000円		5,000円	10,000円
合 計			448,850円	300,000円	35,000円	31,000円	366,000円

助成を受けた主な団体の活動実績

①あそび場オンラインプロジェクト

助成額：26,000 円、赤い羽根助成額：6000 円

子育て支援施設とオンライン交流会を6回実施。昨年度から継続的に申請しているが、審査員からのアドバイスを元に新しい取り組みにも挑戦した。子ども達へのプレゼント企画や、ヴェリタス祭で🍀いろとりどり🍀と連携しNPO 法人彩の子ネットワークとともに子ども服の交換イベントを実施した。



②防災戦隊マモルンジャー

助成額：50,000 円、赤い羽根助成額：6,500 円

子どもたちに楽しく分かりやすく防災を伝えるレンジャーショーを実施。埼玉県内のイベントや防災学習センター、小学校などで7回のショーを行った。地域イベントに出演したことから多くの地域団体ともつながりができ、出演オファーに繋がっていった。



③ Petite Arche 古着プロジェクト

助成額：30,000 円、赤い羽根助成額：3,000 円

学内で古着を回収し、古着を再利用したワークショップを学内で実施。さらに、他大学のサークル・ゼミや本学サステナビリティ推進センターと連携し、ファッションショーを実施。古着を通したSDGsへのアプローチを提案・発信した。



④茶道部

助成額：21,000 円（上尾市外の活動のため赤い羽根助成の対象外）

杉戸町の宿場祭りにて、来場者向けのお茶席を実施。日本の伝統文化である茶道の魅力を伝えること、地域のコミュニティ活動に貢献することを軸に、60名にお点前を披露し、地元の和菓子とともにお茶を提供した。



助成事業に関わった方々の声

①申請団体の声

- ご支援いただきありがとうございました。提携先の子育て支援センターの子どもたちへの楽しいレクリエーションを通して、私たち学生は将来への実践的な学びやチームワーク、地域とかがわる機会を得られる貴重な経験となりました。
- 出資していただきありがとうございました。活動の幅が広がり、また活動内容をまとめ地域の方や他の学生に伝える経験ができたことも糧になりました。今後の活動の励みにもなりました。
- 聖学院大学同窓会の皆様のおかげで、私たちはたくさんの施設に訪問し、たくさんの人々に防災の大切さを伝える、という団体の活動目的を達成することができました。様々な理由で集まった学生たちが、ボランティアを通して貴重な体験をさせていただいているのも、皆様のご支援があってこそです。この一年、我々にご支援いただき、厚く御礼申し上げます。
- この度は、助成金を出資していただきありがとうございました。同窓会の皆様方のご協力のおかげで、よりよい活動をすることができました。今後も、出資していただく方々がワクワクするような活動、モノに助成金を使い、より有意義な活動ができるよう、頑張っていきたいです。これからもよろしく願いいたします。

②審査員の声

- 直接質疑でも話させてもらいましたが、ここまでできているのであれば、依頼に答えるというより、自分たちから主体的に目標に向けて発展させていってもいいと思うくらいよくできている活動だと思います。
- 大学内外に連携を広げ、インパクトを与えるととても意義のある活動をされたと思います。今後のさらなる活躍を期待しています。
- 一緒に手話も使って発表していたので、学んだことが実際に見えたのがよかったです。活動報告は必須ですが、活動助成金の報告会なので助成金の内訳と共に、使い方の反省があってもいいのではないかと思います。
- コロナ渦で対面活動がなかなか難しい中、Zoom を使用し、活動を行っていて素晴らしいと思いました。今後も頑張ってください。

③赤い羽根審査員の声

- 審査する中で、自分が住んでいる町でもSDGsに関連する活動がたくさん行われていたということが分かりました。そのことを自分の学校の生徒たちや、周りの大人に伝えていきたいと思いました。
- 僕は色々なボランティア活動をやってきました。ですが今回の審査会で、自分の知らないボランティア活動がたくさんあることが知れました。みなさんの活動を多くの人に広め

て欲しいです。

- SDGsや防災についてのことに力を入れたいと思っている団体もあり、自分も考えなくてはいけないと思いました。学校での赤い羽根募金にも力を入れていきたいと思いました。

成果と課題

- 本事業検討小委員会の成果：

前年度、7年間続いた本事業を検証し、審査方法をはじめ助成制度の在り方について検討する教職員、現役学生を含む小委員会を立ち上げ、検討を行った。募集枠の2段階設定や、相対評価から絶対評価への変更、次世代への検証のための工夫といった方向性が示され、本年度から変更を行った。募集枠の2段階設定については、既存の申請書類様式を「チャレンジ助成」とし、より詳細な事業計画を記載する様式にするなど少し難易度を上げたものを「一般助成」として設定した。「一般助成」枠で申請した団体も果敢にチャレンジしており、全体の底上げが図れたと考えられるため、次年度以降もこの方向性で継続していく。

- 多様な団体が申請：

コロナ禍にも関わらず、12団体という多くの団体から申請があった。また、有志団体に限らず、これまでセンターと関わりのなかった学友会団体や、地域と繋がりを持ちたい団体が申請をし、実際の地域での連携に繋がった。

- 赤い羽根審査員として小学生が参加：

これまで、赤い羽根審査員として上尾市内の中学生に審査員として参加いただいていたが、当年度より小学生も審査員として参加した。小中学生による積極的な質問の投げかけは、学生の刺激となった。



(2) 聖学院大学復興支援等ボランティア交通費補助

昨年度までは主に東日本大震災の被災地における復興支援ボランティア活動に取り組む本学の学生に対して交通費の補助を行ってきたが、今年度より、災害の被災地における復興支援活動のみならず、遠方での地域社会の課題解決に取り組む活動も対象とした交通費補助として制度の見直しを行い、運用を開始した。しかしながら、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、学生からの本助成金の申請はなかった。

概要：・1年間に2回まで災害の被災地における復興支援ボランティア活動及び地域社会の課題解決に取り組むボランティア活動の交通費について、往復の場合は15,000円、片道の場合は7,500円を上限に補助を行う。なお、活動場所との間に50km以上の区間距離を有すること。

- ・補助に当たっては、事前に申請を行い、センター運営委員会にて決定する。
- ・補助を受ける者は、「活動証明書」「領収書」「活動レポート」の提出が求められる。

5. ボランティア情報のマッチング

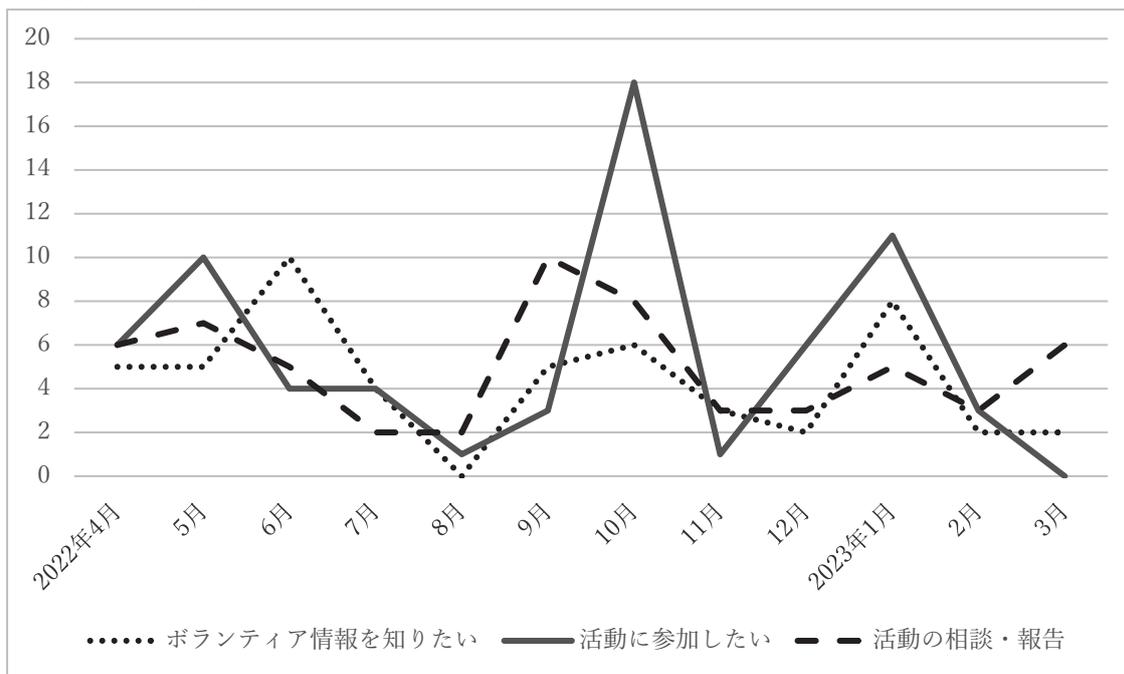
(1) ボランティアマッチング相談対応

新型コロナウイルス感染拡大のため、大学 1 号館地下 1 階“地域共生広場 1cafe”の相談窓口にて行ってきた相談対応を一昨年度から休止した。大学の警戒レベルに合わせ、相談対応を事前予約制に切り替えるなど、臨機応変に対応した。また、電話、メール、ビデオ電話、オンラインチャット（Teams、LINE@）等の様々なツールを活用し、ボランティアを希望する学生、ボランティアに関連した教職員の相談対応、そしてコロナ禍で取り組める活動の紹介や、オンラインを活用したボランティア活動への参加を希望する学生と学内外のボランティア団体とのマッチングを行った。



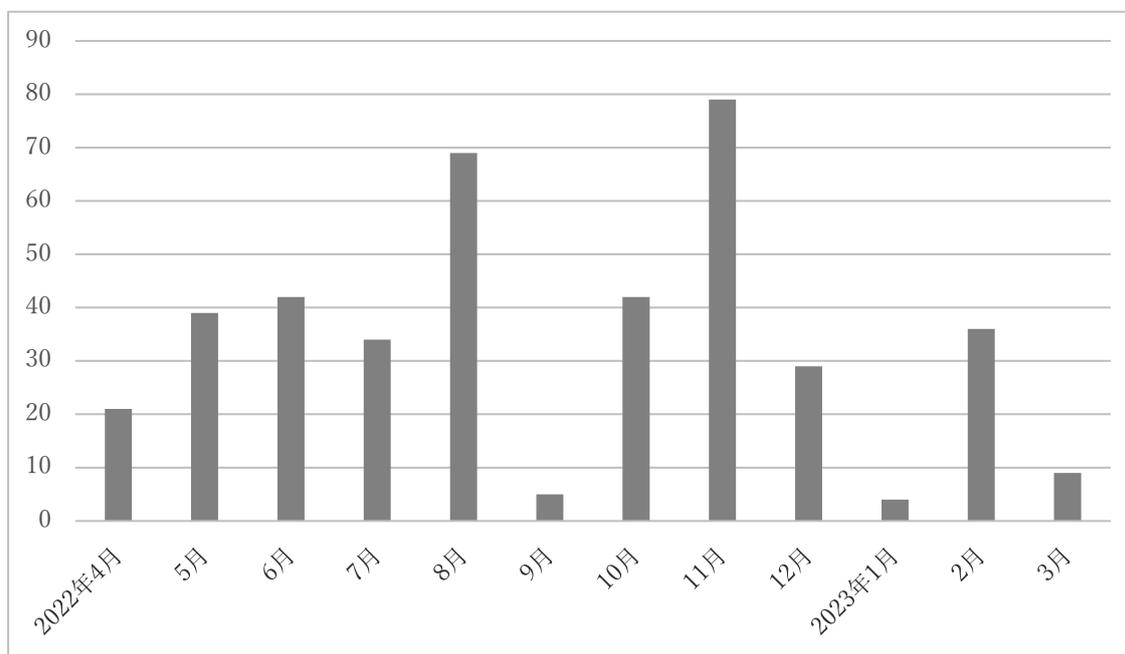
個人ボランティア相談件数と相談内容

相談件数: 179 件内訳



新規ボランティアマッチング件数と活動内容

① 月別マッチング者数 のベマッチング件数:409 件内訳



② 主なマッチング先

月	マッチング先
2022年4月	センター主催：シトラスリボンプロジェクトトリボン製作会 県内：楽しんでつながる会エンジョイント、 FUTURE DESIGN（コドモ農業大学）、
5月	センター主催：東北”オンライン“スタディツアー、 シトラスリボンプロジェクトトリボン製作会 県内：NPO 法人たねの会、いまこころンド合同会社
6月	センター主催：シトラスリボンプロジェクトトリボン製作会 学内：サポメン！ボランティア企画、防犯パトロール活動、ほたる祭り 県内：NPO 法人とさき、楽しんでつながる会エンジョイント
7月	センター主催：シトラスリボンプロジェクトトリボン製作会 学内：サポメン！ボランティア企画 県内：認定NPO 法人彩の子ネットワーク、 社会福祉法人一樹福社会子育て支援センターあすなる、 NPO 法人グリーンバード、NPO 法人たねの会、 楽しんでつながる会エンジョイント、一般社団法人カイロス
8月	県内：社会福祉法人西部福社会、NPO 法人とさき、 認定NPO 法人彩の子ネットワーク、

	<p>公益財団法人いきいき埼玉「いきいきサマーフェスティバル」、 埼玉県防災学習センター、 社会福祉法人一樹福祉会子育て支援センターあすなろ、 NPO 法人わんぱくクラブ</p> <p>県外：環境省「福島、その先の環境へ」環境再生ツアー</p>
9月	<p>県内：公益社団法人全国脊椎損傷者連合会</p> <p>県外：NPO 法人地球緑化センター</p>
10月	<p>センター主催：新聞紙エコバックづくりワークショップ</p> <p>県内：上尾市社会福祉協議会、楽しんでつながる会エンジョイント、 上尾南中学校大学体験プログラム、丘のうえフリースクール、 社会福祉法人一樹福祉会子育て支援センターあすなろ、 公益財団法人いきいき埼玉「彩の国いきいきフェスティバル」</p>
11月	<p>センター主催：ボラフェス！2022、新聞紙エコバックづくりワークショップ</p> <p>学内：子ども服交歓会（認定NPO 法人彩の子ネットワークとの連携）</p> <p>県内：「あげお産業祭」実行委員会、 上尾市消費者団体連絡会「上尾消費生活展」、 楽しんでつながる会エンジョイント</p>
12月	<p>センター主催：タイの子どもたちへのクリスマス企画（アプ・アリプロジェクト）</p> <p>学内：サポメン！ボランティアサロン</p> <p>県内：認定NPO 法人彩の子ネットワーク、 楽しんでつながる会エンジョイント、 社会福祉法人一樹福祉会子育て支援センターあすなろ、 「年末なんでも相談会」実行委員会</p>
2023年1月	<p>県内：楽しんでつながる会エンジョイント、 丘のうえフリースクール</p>
2月	<p>センター主催：東北ボランティアスタディツアー</p> <p>県内：楽しんでつながる会エンジョイント、フリースクール HIRO、 埼玉県防災学習センター、日進北小学校 SSN 防災教室</p>
3月	<p>県内：日高特別支援学校防災教室、 一般社団法人こどもとおとなのあそびとたいわ、 楽しんでつながる会エンジョイント、NPO 法人たねの会 一般社団法人ユメ・フルサト こども夢の商店街</p>

ご対応して下さった団体の皆様、大変お世話になりました。

(2) ボランティア情報の発信(掲示板・メールマガジン・LINE・Teams 等)

学生向けに、様々な媒体で学内外のボランティア情報を発信している。センターや事業の周知については、ポスター等を作成して行っている。
(※製作物は資料編に掲載)



- ①ボランティア掲示板：大学1号館地下1階“地域共生広場1cafe”に相談窓口とあわせて設置している「ボランティア掲示板」では、学内外のボランティア情報のポスターを掲示している。
- ②学内ポータルサイト：学内ポータルサイトUNIPAにて、おすすめボランティア情報をまとめたニュースレターを中心に情報を配信している。
- ③Teams / LINE@：昨年度からTeamsを活用したオンライン授業が導入されたことを受け、センターでもTeamsグループを開設し、配信希望者に月1～3回程度、不定期でニュースレターを中心におすすめボランティア情報を配信している。また、同じく昨年度から公式LINEアカウントを作成し、Teamsと同様に活用している。

④登録者数、配信数：

• Teams

登録者数：191名（2023年8月現在）、配信数：46通

• LINE@

登録者数：212名（2023年3月現在）、配信数：37通

(3) 学外団体からのボランティア募集相談対応

学生ボランティアを募集したい地域団体から相談をいただき、マッチングを行っている。イベント運営ボランティアなど、野外の対面ボランティアなどは少しずつ再開をし始め地域とのつながりを紡ぎなおしていく1年となった。

**学外団体相談対応件数内訳****学外団体相談対応件数 40件内訳**

月	来訪	TEL	MAIL	その他
2022年4月	1	2	-	1
5月	2	-	2	-
6月	1	1	2	1
7月	3	-	-	-
8月	2	2	1	-
9月	1	2	-	2
10月	-	1	1	-

11月	-	3	1	-
12月	2	-	-	-
2023年1月	1	-	-	-
2月	-	2	-	-
3月	1	1	-	1
合計	14	14	7	5

6. 授業・学内イベントへの協力

(1) 授業協力

教員より依頼を受けて、ボランティア活動支援センターの紹介やコーディネーターの職能等に関する講義のため、次の授業にコーディネーターの派遣を行った。



日にち	授業名	対象学生	担当教員	講義内容
10月12日(水)	専門演習Ⅰ (生活支援論)	心理福祉学科	小沼聖治准教授	センターの紹介とボランティア活動について
10月14日(金)	国際ボランティア入門B	欧米文化学科	金沢はるえ講師	国際協力・地域活動などの多様なボランティア実践紹介
11月22日(火)	ボランティア概論／ボランティア論	政治経済学科 心理福祉学科 欧米文化学科 日本文化学科 児童学科	川田虎男講師	ボランティアセンターとボランティアコーディネーション
1月16日(月)、 17日(火)、 20日(金)	社会福祉援助技術演習A	心理福祉学科	猪瀬桂二准教授 長谷部雅美准教授 小沼聖治准教授	ボランティア活動のすすめ

(2) ほたる祭り実施協力

大学周辺には1960年代までは近隣にホタルが生息していたものの、環境の変化で絶滅の危機に瀕した。そこで、ホタルを再生させる取り組みを2003年からスタートさせ、翌年2004年にホタルが集うための水辺「ホタルのピオトープ ～ひかりのせせらぎ～」を大学内に完成させた。ホタルの飛翔を地域の方とともに楽しむ企画として、学生と教員が連携し、2004年より鑑賞会「ほたる祭り」を毎年実施し、近隣地域の方々に好評を得ている。

ボランティア活動支援センターでは、「ほたる祭り」の企画・運営に取り組む学生実行委員の活動支援を行っている。

3年ぶりの開催となる今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、大学関係者と聖学院みどり幼稚園の親子を対象に一般公開という形はとらずに実施した。

日 時：2022年6月25日(土) 17:30～20:30

場 所：光のせせらぎ ほか

主 催：ほたる祭り実行委員会／ほたるクラブ同好会

共 催：ボランティア活動支援センター



来場者：164名

当日スタッフ：学生21名、教職員4名

内 容：・ステージ企画

出演：防災戦隊マモルンジャー、手話同好会しゅわっち

・ほたる鑑賞会

成果と課題

- ・限定公開ではあったが、多くの親子に来場いただき徐々に大学に活気が戻る機会となった。
- ・実行委員の学生全員、ほたる祭りへの参加経験もない中、手探りで企画に取り組み、祭りを復活することができた。



7. 外部との連携・協力など

(1)「ボラフェス！2022」の実施

本学の学園祭「ヴェリタス祭」にて、毎年、近隣や卒業生が働く福祉施設やつながりのある海外支援団体等をお招きし、手作り商品の販売やボランティア募集をしていただくなど施設・団体と学生・教職員、地域の方々との接点をつくる機会として実行委員会形式で実施している。

ヴェリタス祭が3年ぶりの対面開催となり、それに合わせてボラフェス！も3年ぶりに実施した。

日 時：2022年11月2日(水)、3日(木)11:00～12:00

会 場：エルピス食堂

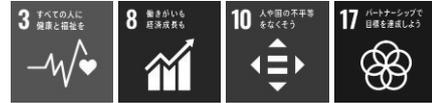
内 容：・福祉施設や海外支援関連団体による出展
・学生手製新聞紙エコバックの配布

参加団体：

- ・NPO 法人とさき 生活介護とさき
- ・社会福祉法人あらぐさ福祉会 労働と教育の場「雑草」
- ・NPO 法人リトルポケット あとりえいあんとむ
- ・NPO 法人みのり 領家グリーンゲイブルズ
- ・社会福祉法人皆の郷 第2川越いもの子作業所
- ・NPO 法人みやはら福祉会 ひびき
- ・社会福祉法人一麦福祉会 ワークスみぎわ
- ・社会福祉法人あげお福祉会 多機能型事業所プラスハート
- ・マゴソスクールを支える会
- ・アプアリ友の会×あかかふえ未来会議 計10団体

学 生：実行委員2名、ボランティア12名 計14名

来場者：2日(水)約200人、3日(木)約600人 計約800人



成果と課題

- ・学生実行委員の伝統が一旦途切れたなかでの実施だったが、サポメン2名が実行委員として企画の準備から携わり、コロナ前と変わらず学生とともにボラフェス！を実施することができた。また、実行委員の学生1名が活動している海外支援団体も新たに参加団体として加わり、新たな団体の活動を紹介することができた。
- ・あらたな取り組みとして、学生が制作した新聞紙エコバックの配布を行ったところ、来場者に非常に好評であった。今後も月1回学内で制作会を実施して、来年度も配布できればと思う。

- 直前の準備や当日の学生ボランティアは多く集まったが、来年度学生実行委員が集まるかどうかは不安が残る。学生の集まり具合に応じてやり方を変える必要があるだろう。

《参加団体の声（一部抜粋）》

- この度はお招き頂きありがとうございました。内々の活動は戻り始めましたが、今回のような規模で地域の方と何かをする機会はほぼなかったので、あらためてとても貴重な体験をさせていただいたと感じています。他の事業所の方も来られていたので、いろいろな活動の仕方があることも利用者さんたちから聞いたのもすごくいい経験でした。
- この度は3年ぶり開催のボラフェスに参加させていただきありがとうございました。平日の参加ではありましたが、多くの皆様に商品を購入していただき、また施設の紹介をさせていただきました。また、ボランティアとしてお手伝いをいただきました御校の学生とコミュニケーションが取れたことも大きな収穫であったと感じております。商品の話にとどまらず、作業所で働く仲間たちの事や現場の支援について等、ストレートなお話をする事は学生にとってある意味学校では学ぶことが出来ないものだと思います。そういった機会を得た事もまた、このイベントの良さであり意義の一つだと感じました。一緒に参加させていただいた仲間も楽しかったようで、「また行きたい」と言っております。次回は仲間たちが作業所で仕事をする様子などを動画で見ていただけるような取り組みをしたいと考えております。

(2)地域イベントへの参画・登壇

i)地域イベントへの参画

上尾市やさいたま市等で行われるイベントについては、企画段階から関わるが増えてきている。学生も担い手の一人としての自覚を持ち参加することで、学生と地域との顔の見える関係が育まれつつある。今年度は地域イベントの実施が少しずつ再開しており、状況に応じて活動へのマッチングを行った。



地域イベントの参加実績と内容

日にち	依頼元／イベント名	参加内容	参加人数
2022年 8月20日(土)	公益財団法人いきいき埼玉／「けんかつサマーフェスティバル」・「こども☆夢☆未来フェスティバル」	<ul style="list-style-type: none"> ・ステージ司会 ・運営ボランティア ・ステージ出演：防災戦隊マモルンジャー、アカペラ部てくてく、手話同好会しゅわっ 	47名

		ち、軽音楽部サウンドスクエア ・子どもあそびブース出展： ✿いろとりどり✿	
8月21日(日)	埼玉県防災学習センター	防災戦隊マモルンジャー	4名
8月28日(日)	アリオ上尾／「防災の日イベント」	防災戦隊マモルンジャー	4名
10月23日(日)	埼玉県県民活動総合センター／「彩の国いきいきフェスティバル」	防災戦隊マモルンジャー	6名
11月12日(土)	「あげお産業祭」	ステージ出演：手話同好会しゅわっち 運営ボランティア	8名
11月26日(土)	上尾消費生活展	ステージ出演：防災戦隊マモルンジャー、アカペラ部てくてく、軽音楽部サウンドスクエア 運営ボランティア	45名
12月4日(日)	杉戸町観光協会／日光街道杉戸宿『宿場まつり』	茶道部によるお茶会	6名
2023年 2月18日(土)	さいたま市内公立小学校 土曜チャレンジスクール	チーム防災による防災教室	2名
2月26日(日)	さいたま市立日進北小学校 ／防災教室	ステージ出演：防災戦隊マモルンジャー	6名

ii) 学生による外部イベントでの登壇

上尾市やさいたま市、その他つながりのある団体やそれらの主催イベント等にて、学生が登壇し活動発表をした。



学生の登壇実績と内容

日にち	依頼元／登壇先	イベント名／内容	参加者
2022年 8月24日(水)	さいたま市市民活動サポートセンター	「NPOと学生生活のススメ」 ／活動紹介など	2名
10月15日(土)	上尾市立南中学校	チーム防災による防災講座	2名
11月28日(月)	女子聖学院中学校	チーム防災による防災講座	4名
2023年 2月16日(木)	桶川市市民活動サポートセンター	市民活動セミナー／「これからの市民活動とその視点～Z世代に学ぶ～」	3名
2月18日(土)	さいたま市内 公立小学校 チャレンジスクール	チーム防災による防災講座	2名
3月8日(水)	日高特別支援学校	リアスによる防災特別授業 (オンライン)	2名

(3)法人内での連携



i)聖学院中学校中1総合学習L.L.T.「Learn Live Together」への協力

聖学院中学校の依頼を受けて、中学1年生3学期の総合学習L.L.T.において、日頃ボランティア活動に取り組む学生が活動を通して学んだことや感じたことなどを伝え、生徒のボランティア活動への興味関心を引き出す授業を行った。また協力にあたっては、授業に協力する学生の伝える力とファシリテーション力を高める研修会を実施した。

研修会

日時：2023年2月9日(水) 9:00~12:00 Zoom 開催

参加者：L.L.T.協力学生が参加

内容：・趣旨説明

聖学院中学校高等学校チャプレン 久保哲哉先生

・協力内容の確認

・ワーク①話す練習

②投げかける質問を考える

③質問を使って会話を進行してみる

授業

日時：2023年3月1日(水) 10:50~11:40 対面開催

協力学生：ボランティア経験のある学生 12名

内容：教室ごとにテーマを設け、生徒は関心に応じた教室に移動して授業に参加した。活動を紹介することに留まらず、自身の経験を語る学生、手話を教える学生、それぞれに生徒の関心を引き出す工夫をしながら授業を行い、質疑応答も活発に行われた。

各授業テーマ：

- ・学生目線でSDGsを広げる
- ・手話でコミュニケーションを広げる
- ・障がいのあるこどもたちとの関り
- ・オンラインでの乳幼児親子との交流
- ・防災の大切さを伝える



(4) 関東地区大学ボランティアセンターネットワーク

これまで、大学ボランティアセンター・コーディネーター研究会（通称：ほんわかねっと）として、2013年より関東圏の大学ボランティアセンターの教職員の研修と情報交換を目的に研究会を行ってきた。近年参加大学が増えてきていることを受け、東京ボランティア・市民活動センターと連携し、大学ボランティアセンターにおけるコーディネーターの専門性向上を目的とした新団体を設立した。

設立総会

日 時：2022年5月20日(金) 15:00～17:00

会 場：東京ボランティア・市民活動センター

内 容：・趣旨説明

- ・入会確認
- ・運営担当の選出
- ・年間テーマについて

参加校：青山学院大学シビックエンゲージメントセンター／

神田外語大学ボランティアセンター／成蹊大学ボランティア支援センター／

中央大学ボランティアセンター／明星大学明星教育センター／

立教大学ボランティアセンター／立正大学ボランティア活動推進センター／

聖学院大学ボランティア活動支援センター

第1回研究会

日 時：2022年9月2日(金) 14:00～17:00

会 場：立教大学

内 容：年間テーマ：「アフターコロナに向けた支援のあり方について」

- ・立教大学ボランティアセンター見学
- ・テーマ別にグループで話し合い
 - A:ボラセン主催の講座・イベントについての工夫
 - B:学生主体の支援として団体の活動（活性化・引継ぎ）への介入について
 - C:学生の相談・ボランティア紹介についての工夫

参加校：青山学院大学シビックエンゲージメントセンター／

神田外語大学ボランティアセンター／成蹊大学ボランティア支援センター／

中央大学ボランティアセンター／明星大学明星教育センター／

立教大学ボランティアセンター／立正大学ボランティア活動推進センター／

東京ボランティア・市民活動センター／

聖学院大学ボランティア活動支援センター

大学・短大における学生ボランティア活動支援連絡会

日 時：2022年12月3日(土)14:00～17:00

会 場：東京ボランティア・市民活動センター

内 容：「大学・短大等における学生ボランティア活動支援連絡会～アフターコロナでの若者・学生団体の行動変容と支援のあり方とは～」

主 催：東京ボランティア・市民活動センター

共 催：東京都（生活文化スポーツ局 都民生活部 地域活動推進課 活動支援国際担当）

協 力：関東地区大学ボランティアセンターネットワーク

参加者：約60名（大学ボランティアセンター職員、社会福祉協議会、ボランティア・市民活動センター、ボランティア活動推進機関など）

第3回研究会

日 時：2023年3月3日(金)15:00～17:00

会 場：青山学院大学

内 容：年間テーマ：「アフターコロナに向けた支援のあり方について」

- ・青山学院大学シビックエンゲージメントセンター見学
- ・取り組み報告（成蹊大学、神田外語大学）
- ・テーマ別にグループで話し合い
- ・2022年度の振り返り
- ・2023年度の年間テーマについて
- ・2023年度運営体制に関して協議

参加校：青山学院大学シビックエンゲージメントセンター／

神田外語大学ボランティアセンター／成蹊大学ボランティア支援センター／

中央大学ボランティアセンター／明星大学明星教育センター／

立教大学ボランティアセンター／立正大学ボランティア活動推進センター／

淑徳大学地域共生センター／

高崎健康福祉大学ボランティア・市民活動支援センター／

東京ボランティア・市民活動センター／

聖学院大学ボランティア活動支援センター

8. その他

(1)センター10周年事業

i)書籍「共に育つ“学生×大学×地域”人生に響くボランティアコーディネーション」の出版

ボランティア活動支援センター設立 10 周年を記念して、大学における学生ボランティアの意義（学生の成長や大学・地域の変化）と共にその支援のあり方（ボランティアコーディネート）についてまとめ、広く社会に発信することを目的に実施した。



ボランティア活動支援センターの現任教職員だけでなく、センターに関わりのある在学生・卒業生・前任教職員による「編集委員会」を立ち上げ、書籍づくりに取り組んだ。

編集委員会実施日：

- 第一回：2021 年 12 月 22 日(水)
- 第二回：2022 年 1 月 19 日(水)
- 第三回：2 月 16 日(水)
- 第四回：3 月 15 日(火)
- 第五回：5 月 11 日(水)
- 第六回：6 月 22 日(水)
- 第七回：7 月 27 日(水)
- 第八回：10 月 26 日(水)

※すべてオンラインで開催

執筆者：49名

内 容：

（書籍「はじめに」より一部抜粋）

聖学院大学ボランティア活動支援センター（通称：ボラセン）は、2022 年に設立 10 周年を迎えました。ボラセン設立の直接の契機は、2011 年の東日本大震災に際し、被災地の方々に心を寄せた学生たちの熱い想いと積極的な行動を、大学として応援しようとしたことにあります。それ以来、ボラセンは専門職スタッフであるボランティアコーディネーターを中心に、さまざまな困りごとを抱える地域や人びとに寄り添う学生たちの想いをカタチにするお手伝いを続けてきました。

振り返ってみると、その歩みは学生たちと共に教職員・大学も学び、育っていくプロセスでした。また、ボランティア活動を通して地域の課題に取り組みながら、同時に地域の皆さまから学生や大学を育てていただくプロセスでもありました。設立 10 年を機にこのプロセスの内実とその意義、そのなかでボランティアコーディネーション実践が果たしてきた機能と意義を確認し、広く世に問うことが本書刊行の意図です。

成果と課題

2022年3月に「共に育つ“学生×大学×地域”人生に響くボランティアコーディネーション」を出版することができ、センターの10周年の歩みとして多くの関係者の協力のもとをまとめることができた。また、書籍の出版・販売を通して聖学院大学ボランティア活動支援センターの取り組みについて、全国に発信することができた。

ii)「共に育つ“学生×大学×地域”人生に響くボランティアコーディネーション」出版記念シンポジウム

「神を仰ぎ 人に仕う」という建学精神のもと、聖学院大学では建学以来その理念の具現化としてボランテ



ィア活動が活発に取り組みられてきた。その土台の上に、東日本大震災を経て、2012年4月よりボランティア活動支援センターによる支援が展開されてきた。「共に育つ“学生×大学×地域”人生に響くボランティアコーディネーション」出版にあたり、活発な学生ボランティアや熱心な教職員の存在に後押しされて設立されたセンターの、10年の振り返りと、その社会的意義について確認を行うシンポジウムを実施した。なお、本イベントは「ボランティア活動支援センター開設10周年記念“ボランティアの集い”」のプログラムの一環として開催した。

日 時：2023年3月21日(火)13:00~14:40

会 場：聖学院大学チャペルほか YouTube で配信

登壇者：丸山阿子（元コーディネーター）

菅野雄大（卒業生、元STEP.代表、学生サポートメンバー）

芦澤弘子（コーディネーター）

平修久（ボランティア活動支援センター前所長、名誉教授）

鈴木玲子さん（認定NPO法人彩の子ネットワーク共同代表）

新井達也先生（自由の森学園高等学校前校長）

西川 正さん（NPO法人ハンズオン埼玉副代表理事）

参加者：会場来場者 115名、オンライン配信視聴者（リアルタイム）22名

内 容：

一 開 会 清水正之（聖学院大学学長／学校法人聖学院理事長）

一 第一部

導 入 若原幸範（ボランティア活動支援センター所長、政治経済学科准教授）

書籍第Ⅰ章 学生ボランティア支援の理論と実際

書籍第Ⅱ章 学生ボランティアの可能性

概要説明：川田虎男（ボランティア活動支援センターアドバイザー）

エピソード報告：丸山阿子（元コーディネーター）

菅野雄大（卒業生、元STEP.代表、学生サポートメンバー）

芦澤弘子（コーディネーター）

— 現役学生ボランティアによる活動報告

— 第二部

書籍第Ⅲ章 学生ボランティアと地域

書籍第Ⅳ章 学生ボランティアと大学

概要説明：平修久

（ボランティア活動支援センター前所長、名誉教授）

エピソード報告：鈴木玲子さん

（認定 NPO 法人彩の子ネットワーク共同代表）

新井達也先生（自由の森学園高等学校前校長）

— 総 評 西川 正さん（NPO 法人ハンズオン埼玉副代表理事）

成果と課題

多くの来場者と共に、新たに出版された書籍の内容を確認しつつ、聖学院大学のボランティアの歩みとボランティア活動支援センターの取り組みについて共有する機会となった。

iii) ボランティア活動支援センター開設10周年記念“ボランティアの集い”の実施

聖学院大学でボランティアに携わった多くの卒業生や現役の学生、地域の方々が集う「ボランティアの集い」を、出版記念シンポジウムとともに実施した。これまで



の活動への感謝を伝えるとともに、今後の聖学院大学のボランティア活動をより盛り上げていく機会とした。

“集い”の実施に当たり在学生・卒業生による実行委員会を立ち上げ、実行委員会主催で実施した。

日 時：2023年3月21日(火・祝日)13:00～17:00

会 場：聖学院大学エルピス館

実行委員会実施日：

第一回：2022年10月10日(月)ハイブリッド開催

第二回：12月12日(月)オンライン開催

第三回：2023年2月13日(月)オンライン開催

作業日：3月4日(月)対面開催

参加者：115名

内 容：

— ボラセン10周年書籍発行記念シンポジウム（詳細は前述）

— 懇親会（トークフォークダンス、釜石物産コーナー、10周年記念グッズプレゼント、スライドショー上映、書籍販売&サイン会等、タイムカプセル作り）

成果と課題

当日の参加者は、学生時代のボランティア活動に留まらず、社会人になってからも他者や社会のために真剣に考え、具体的な行動をとり続けている。まさに「神を仰ぎ 人に仕う」という大学の理念を体現している参加者と共に、10年の節目を祝えたことが一番の成果であった。

(2) ボランティア活動支援センター広報活動

i) WEB 上での情報発信

センターの取り組みを外部へ発信することを目的として、ホームページを設置している。日々の活動については、Facebook ページで紹介している。

- ボランティア活動支援センターホームページ：

<https://www.seigakuin.jp/life/seig-volunteer/>

- Facebook ページ フォロワー数：538 人（2023 年 9 月 1 日現在）



ii) 広報ツールの作成・更新

センターや事業の周知については、ボランティア活動支援センター事業報告書の発行・送付、ポスター等の作成を行っている。

(3) ボランティア活動支援センター研究会

学生ボランティア支援に関わる専門性の向上を目的として、2021 年度よりセンター内に研究会を発足した。今年度は、聖学院大学研究所の研究助成金を取得し、「大学ボランティアセンターの教育機能の発揮条件に関する実証的研究～ボランティアコーディネーターの支援実践に着目して～」というテーマで研究を行った。また、半年に1度のペースで日常的なボランティアコーディネーションに関わるケース検討等を実施した。実施体制：センター内の研究会であり、構成メンバーはセンター所長とコーディネーター、アドバイザーとなっている。



第一回 ボランティア活動支援センター研究会

日 時：2022 年 5 月 24 日(火) 13:00～15:00 対面開催
参加者：若原所長、アドバイザー1 名、コーディネーター2 名
内 容：・今後の本研究会と学内研究助成申請についての確認
・大学ボラセン全国調査の内容についての意見交換

第二回 ボランティア活動支援センター研究会

日 時：2022 年 6 月 28 日(火) 13:00～15:00 対面開催
参加者：若原所長、アドバイザー1 名、コーディネーター2 名

- 内 容：・研究における調査先に関する資料読み合わせ
・調査項目の検討

第三回 ボランティア活動支援センター研究会

- 日 時：2022年7月19日(火)13:00～15:00 対面開催
参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター2名
内 容：・「大学ボランティアに関する全国実態調査報告書」クロス集計項目の確認
・調査項目の決定
・関東地区調査の進捗共有

第一回事例検討会

- 日 時：2022年8月9日(火)13:00～15:00 対面開催
参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター3名
内 容：コーディネーション事例検討

調査視察

- 日 時：2022年9月12日(月)～14日(水)
参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター2名
内 容：関西地区の大学ボランティアセンターでヒアリングを実施

第四回 ボランティア活動支援センター研究会

- 日 時：2022年10月13日(木)9:30～11:30 対面開催
参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター2名
内 容：・学会での発表内容についての確認
・調査視察振り返り

第五回 ボランティア活動支援センター研究会

- 日 時：2022年11月24日(木)13:30～15:30 対面開催
参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター2名
内 容：調査視察でのヒアリング分析

第六回 ボランティア活動支援センター研究会

- 日 時：2022年12月22日(木)13:30～15:30 対面開催
参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター1名
内 容：・学会発表報告
・調査視察でのヒアリング分析

第七回 ボランティア活動支援センター研究会

日 時：2023年1月26日(木)13:30～15:30 対面開催

参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター1名

内 容：・学会への論文投稿についての確認
・ヒアリング調査結果検討

第八回 ボランティア活動支援センター研究会

日 時：2023年2月22日(水)13:00～17:00 対面開催

参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター2名

内 容：・学会への論文投稿についての確認
・ヒアリング調査結果検討
・来年度の調査に関する検討

第九回 ボランティア活動支援センター研究会／第二回 事例検討会

日 時：2023年3月16日(木)13:00～15:00 対面開催

参 加：若原所長、アドバイザー1名、コーディネーター2名

内 容：・ヒアリング調査結果検討
・来年度の調査に関する検討
・コーディネーション事例検討

研究成果発表

日 時：2022年11月26日(土)、27日(日)

発表先：日本福祉教育・ボランティア学習会

研究発表内容：大学ボランティアセンター職員の専門性に関わる基礎的研究

発表者：川田虎男

(4)コーディネーターのスーパーバイズ

センター発足時から、コーディネーターの日々のボランティアコーディネーションについて、毎週1回(15～60分程度)スーパービジョンを実施している。困難な調整事例や課題のある学生への対応方法など、コーディネーターが一人で抱え込まない環境づくりを行うことや、複数で課題を検討することで、様々なアイデアが生まれ、よりよい支援や活動につなげることを目的としている。

■スーパーバイズ：毎週1回15～60分



(5)研修・勉強会参加実績

日にち	研修先・勉強会名等	参加人数
2022年 9月9日(金)	大学ボランティアセンター職員セミナー2021 主催：認定NPO 法人日本ボランティアコーディネーター協会 会場：オンライン（Zoom）	コーディネーター1名

(6)活動発表・講師対応

日にち	対応先
2022年 9月9日(金)	大学ボランティアセンター職員セミナー 内容：センター紹介、分科会3：「活動を豊かにするオンラインコミュニケーションツールとの付き合い方」 事務局：NPO 法人ボランティアコーディネーター協会 事例発表：芦澤弘子
11月26日 (土)、27日 (日)	日本福祉教育・ボランティア学習会 研究発表内容：大学ボランティアセンター職員の専門性に関わる基礎的研究 研究発表：川田虎男
12月18日 (日)	市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会 主催：認定NPO 法人日本ボランティアコーディネーター協会、市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会実行委員会 内容：B3分科会：「学生の成長」と「地域貢献」をどうコーディネートします？ コメンテーター・事例発表者：川田虎男
2023年 2月11日 (土)	市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2023 事務局：東京ボランティア・市民活動センター 内容：分科会10：私のボランティア活動は「何のため？」「なぜ続けているの？」 講師：川田虎男
2月12日 (日)	市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2023 事務局：東京ボランティア・市民活動センター 内容：分科会19：コロナに負けない！学生たちの取り組みから学ぶ、活動運営のコツ 進行：芦澤弘子
2月16日 (木)	市民活動セミナー 主催：桶川市市民活動サポートセンター 内容：これからの市民活動とその視点～Z世代に学ぶ～ 講師：原一織

3月9日(木)	<p>第9回地域福祉推進プラットフォーム</p> <p>主催：社会福祉法人埼玉県社会福祉協議会</p> <p>内容：災害復興支援に関する取り組みと連携の歩み</p> <p>事例発表：芦澤弘子</p>
---------	---

(7)外部委員

氏名	所属委員会
川田虎男	<ul style="list-style-type: none"> ・ パルシステム埼玉市民活動支援助成金審査員（委員長） ・ コープみらい×中央共同募金会 子ども・子育て支援助成審査委員 ・ 埼玉県社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター運営委員 ・ 上尾市社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員（委員長） ・ 日本福祉教育・ボランティア学習会特任理事
芦澤弘子	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学ボランティアセンター職員セミナー実行委員 （認定 NPO 法人日本ボランティアコーディネーター協会） ・ 市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2023 準備会委員 ・ 市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2023 実行委員（実行委員長）（事務局：東京ボランティア・市民活動センター） ・ 埼玉県災害初動対応支援者ネットワーク会議 （埼玉県ボランティア・市民活動センター）

資料集

1. 聖学院大学ボランティア活動支援センター内規

聖学院大学ボランティア活動支援センター内規

(目的)

第1条 聖学院大学(以下「本学」という。)は、聖学院教育憲章内の「神を仰ぎ 人に仕う」、オンライン・フォー・アザーズ(他者のために生きる個人)、サーヴァント・リーダーシップなどの精神の具現化のため、キリスト教大学における教育活動の一環として推奨されるボランティア活動の普及に取り組み、本学における諸ボランティア活動を支援するために、聖学院大学ボランティア活動支援センター(以下「センター」という。)を設立する。

(組織)

第2条 センターの活動を円滑に展開するために、次の教職員を置く。

- (1) センター所長 1名
- (2) センター副所長 若干名
- (3) ボランティアコーディネーター及びアドバイザー 若干名
- (4) 事務職員 若干名
- (5) その他学長が大学教授会で指名した者

2 センターの運営は、第3項に規定する聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)によってなされ、センター所長が議長を務める。

3 運営委員会は以下の構成員から構成される。

- (1) センター所長
- (2) センター副所長
- (3) チャプレン
- (4) 聖学院大学教授会代表(数名)
- (5) 聖学院大学学生代表(数名)
- (6) 大学事務局管理部長
- (7) ボランティアコーディネーター
- (8) アドバイザー
- (9) センター職員
- (10) 聖学院大学学長、総局長は必要に応じ陪席できるものとする
- (11) その他、センター所長が必要と認める者

4 第1項第1号に規定されるセンター所長は、学長が指名する。

5 第1項第2号に規定されるセンター副所長は、所長が若干名を指名する。

(事業)

第3条 センターは、第1条の目的を実現するために以下の事業を担当する。

- (1) キリスト教に基づくボランティア精神の育成と普及に関する事業
- (2) ボランティアの人材育成とその担保に関する事業
- (3) 学内の諸ボランティア活動の連絡、協力および支援に関する事業
- (4) 学外のボランティア情報の紹介とその活動の支援に関する事業
- (5) ボランティア基金の育成と経済的支援に関する事業
- (6) ボランティア活動の記録と広報に関する事業

(改廃手続)

第4条 この内規の改廃は、大学教授会の議を経て、学長が決定する。

附 則

この規程は、2013年4月1日から施行する。

附 則

この内規の一部改正(規程形式及び運営委員会の構成員の変更)は、2018年12月17日から施行する。

2. ボランティア活動支援センター運営委員一覧(2022年度)

センター所長	若原幸範	学長補佐、政治経済学科准教授
センター副所長	渡辺正人	地域連携・教育センター所長、基礎総合教育部教授
運営委員	氏家理恵	欧米文化学科教授
	清水 均	日本文化学科教授
	柴崎 裕	児童学科特任教授
	木村太郎	人間福祉学部／心理福祉学部チャプレン、特任助手
	金久保仁	学生サポートメンバー、児童学科4年
	和田果恋	学生サポートメンバー、日本文化学科3年
	真野和英	経営企画部長
	今村優子	大学総務課
	山田裕太	大学総務課
	川田虎男	ボランティア活動支援センターアドバイザー
芦澤弘子	ボランティアコーディネーター	

3. ボランティア活動支援センター運営委員会協議事項

第109回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2022年4月6日(水)午後1時30分～2時30分【対面開催】

・ボランティア・まちづくり助成事業の実施について

第110回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2022年5月11日(水)午後3時20分～4時20分【オンライン開催】

協議事項なし

第111回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2022年6月8日(水)午後3時20分～4時20分【オンライン開催】

・「ボランティア交通費補助規程」の改正について

第 112 回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2022 年 7 月 6 日(水)午後 3 時 20 分～4 時 20 分【オンライン開催】

協議事項なし

第 113 回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2022 年 9 月 7 日(水)【持ち回り開催】

協議事項なし

第 114 回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2022 年 10 月 5 日(水)午後 3 時 20 分～4 時 20 分【オンライン開催】

協議事項なし

第 115 回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2022 年 10 月 26 日(水)【持ち回り開催】

協議事項なし

第 116 回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2022 年 11 月 30 日(水)午後 3 時 20 分～4 時 20 分【オンライン開催】

・2023 年度の事業計画・予算について

・冬の東北ボランティアスタディツアーの開催について

第 117 回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2023 年 1 月 11 日(水)午後 3 時 20 分～4 時 20 分【オンライン開催】

協議事項なし

第 118 回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2023 年 2 月 1 日(水)【持ち回り開催】

協議事項なし

第 119 回 聖学院大学ボランティア活動支援センター運営委員会

日時 2023 年 3 月 1 日(水)【持ち回り開催】

4. メディア出演・掲載

- 上尾消費者団体連絡会主催インターネットラジオ「ゆるカルらぢお」:2022年4月1日配信開始
防災戦隊マモルンジャー出演

<https://podcasts.apple.com/jp/podcast/%E3%82%86%E3%82%8B%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%82%89%E3%81%A2%E3%81%8A/id1585940268>

- 埼玉県社会福祉協議会月刊誌「S・A・I」:2022年9月

「ボランティア活動を通じた学生の成長を応援」

著作権により非表示

- J:com「ウィークリートピックス」:2022年10月8日(土)

夏の東北オンラインスタディツアー

- 聖学院 NEWS LETTER No.285:2023年3月

チーム防災教室で活動する学生インタビュー、男子聖学院中学高等学校と大学との連携

- J:com:2022年3月10日(金)

東北ボランティアスタディツアー2023 冬

5. 広報ポスター各種

■ボランティア勧誘 DAY!!

「話を聞くだけ」大歓迎★

ボランティア勧誘DAY

～ボラKAN!～

ボランティアに興味のある人、集まれ～!

日にち: 2022.4.12(火)、14(木)、15(金)

時間: 昼休み (12:10～13:00)

場所: 1号館前芝生エリア

※雨天の場合は1号館地下1階

対象: 聖学院大学全大学生

紹介予定のボランティア活動

- ・オンラインでの子どもとの交流活動
- ・震災の風化を防ぎ、防災を広げる活動
- ・SDGsに取り組む活動

などなど!

学内外のボランティア団体や
個人で参加できる活動を紹介します。

問い合わせ: ボランティア活動支援センター (場所: 1号館1階 1103教室)
Tel: 048-780-1705 (平日9時～17時) E-mail: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp
主催: 聖学院大学学生サポートメンバー / サボメン / 聖学院大学ボランティア活動支援センター

■春の東北“オンライン”スタディツアー

参加者募集中!

聖学院大学 東北“オンライン”スタディツアー

東日本大震災を学び、東北の魅力に触れ、語り合う1日

聖学院大学は東日本大震災復興支援活動を継続的に行ってきました。昨年引き続き、「オンライン」を通じて、学びと交流の機会を持ちます。皆さんの参加をお待ちしています。

開催日時 5月14日(土)10:00～16:00

■募集人数: 30名

■対象: Zoomでのビデオ通話※可能な方
※Zoomアプリのダウンロードや参加方法については申し込みの際にお知らせします。
また、交流企画や振り返りはビデオ、マイクともオンラインで参加いただけます。

■参加費: 無料 ※学生交流企画に参加希望の方は教員代として600円いただきます。

■申込方法: 聖学院大学ボランティア活動支援センターまで来室、または
フォーム (<https://forms.office.com/r/1gsZ02LxZ2>) から申し込みください。
※学生交流企画 (詳しくは裏面をご覧ください) に参加されるのは5月9日(月)～13日(金)にボランティア活動支援センターにて参加費をお支払いください。『東北の一品』をお送りします。

■申し込み締切: 5月6日(金) ※定員に達し次第締め切りとなります。

■主催: 聖学院大学ボランティア活動支援センター 企画・運営: 聖学院大学学生有志
協力: Team大川-未来を拓くネットワーク

※現地とオンラインでつなぐ関係で、新型コロナウイルス感染症拡大状況によっては中止となることもあります。あらかじめご了承ください。

★ツアーに関する問い合わせは、ボランティア活動支援センター (1号館1階1103教室) まで★
来室、メール、電話で受け付けます。
メール: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp TEL: 048-780-1705 (平日午前9時～午後17時) 詳細は裏面へ

■シトラスリボン製作会

コロナ禍での偏見や差別をなくそう

シトラスリボンプロジェクト リボン製作会 参加者募集!

シトラスリボンとは?

新型コロナウイルス感染症による誤解中傷や差別をなくそう。
「ただいま、おかえり」と言い合える優しい気持ちがありますように、
一堂集まりで生まれたプロジェクトです。リボンの3つの輪は、「地域・家庭・職場(学校)」を表しています。
この輪に共感し、埼玉県内でもシトラスリボンを広める活動が盛んになっています。
※完成したリボンは後日回収し、地域での啓発活動に使用していただく予定です。

日時: 4月28日(木)12:20～12:55
場所: 2304教室(定員15名)

内容: シトラスリボンづくり
準備するもの: はさみ(持っていない人は貸し出しします)

シトラスリボンプロジェクトの紹介やリボンのつくり方の動画をボランティア活動支援センターのTeamsグループに掲載しています。興味のある方は視聴方法をお伝えしますのでボランティア活動支援センターまでお声がけください。

申し込み方法: 来室(1103教室)、もしくはメールで4月25日(月)昼休みまでに申し込みください。メールでの申し込みは、タイトル「リボン製作会参加希望」とし、①氏名、②学籍番号を明記のうえ、vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp にお願います。

主催・問い合わせ: ボランティア活動支援センター(1号館1階1103教室)
メール: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp Tel: 048-780-1705
開室時間: 平日9時～17時

当日スケジュール (予定)

10:00～12:00 只野哲也さん&リアス 未来を拓く対談

宮城県石巻市立旧大川小学校では、東日本大震災で発生した津波で児童74名、教職員10名が犠牲となりました。「24名の助かった子どもたちや家族が、これまで抱え、背負ってきたものや、これからの願いを共有できる場を大川に取り戻したい」という思いで、自らも大川小学校の生徒として被災体験と向き合いながら活動をされている只野さんのお話を伺います。また、この1年間どのように現場が変わっていったのか、只野さんの考えと伝えたいことを、参加者のみなさんとの質疑応答も交えながら、対談形式で進めていきます。 [企画担当: 菊池、西野、山口]

12:15～13:30 休憩

12:30～13:15 学生交流企画 (希望者のみ)

休憩時間に行いますので、参加の有無は自由です。
主催学生おすすめの東北の一品をみんなで味わいつつ、楽しく交流をします。
※参加希望者は、こちらのプログラムの参加費支払い後に『東北の一品』をボランティア活動支援センターでお渡します。当日まで各自自宅保管いただき、この時間になったら、オンラインでつながりながら一緒に味わいましょう! [企画担当: 山口、豊]

13:30～14:30 どれだけ揃う? 防災グッズ借り物競争!

防災グッズってそもそも何なの? そんなの別に必要くない? そんなこと思った君たち! 防災グッズってとても大切なものなんだ。地震が起こってから準備しようじゃもう遅い! 借り物競争で防災グッズを集めよう! 防災バックの中身と必要なる理由を楽しく学べるよ! [企画担当: 長谷川、豊]

14:30～15:00 夏の東北ボランティアツアーのご紹介

夏休み期間に貸切バスで直接東北を訪れる「ボランティア・SDGsスタディツアー」を実施する予定です。その時現地でお会いする只野さんや釜石出身の大学生から、夏の活動について紹介させていただきます。 [企画担当: 中尾]

15:00～16:00 参加者間での振り返り

ツアーに参加して感じたことや考えたこと、自分たちにはできることは何か、といったテーマで参加者同士による意見交流を行います。

■ ボランティア・まちづくり活動助成事業(表面)

**社会貢献活動を
がんばるみなさん
を応援します!**

ゼミ サークル 各種委員会 学生会クラブ 有志の集まり

聖学院大学ボランティア・まちづくり活動助成事業

地域・社会貢献活動に取り組む学生を対象とした、卒業生の皆さん(聖学院大学同窓会)出資による活動資金の助成制度です。

申請期間 ▶▶ 2022年5月17日(火)~27日(金)17:00
事前説明および研修会 ▶▶ 5月9日(月)・10日(火) ※いずれか1日に参加必須

新しい活動にチャレンジしてみたい!
活動のための機材準備に資金が必要!
続けたい活動はあるけど、交通費が大変...
どんなあなたもオススメ!

助成額:最大50,000円
対象:地域・社会に貢献する意欲を持った聖学院大学生5名以上が所属するグループ
★申請書類の内容と公開審査会でのプレゼンテーションをもって、助成額を決定します。

申し込み・問い合わせ▶▶聖学院大学ボランティア活動支援センター(1103室、平日9時~17時) TEL:048-780-1705 Mail:vol-sup@seigaikuin-univ.ac.jp 詳細は裏面をチェック

1プロジェクト最高 **50,000円** (総額300,000円)

社会貢献活動に関わるゼミを応援します!
聖学院大学ボランティア・まちづくり活動助成金

ボランティア活動支援センターでは、大学同窓会の協力を得て、ボランティアに取り組む学生の活動支援等の教育活動の一環として、地域貢献に関わる活動について助成を行っています。学生たちの企画力やプレゼン力等の実践力を身に付ける機会にもなります。ぜひ、地域へ教育の活動費として、本助成金をご活用ください。

助成対象になるゼミ活動例
☆地域の子どもを対象に遊びのひろばや読み聞かせのひろばを開催
☆伝統文化を伝えるイベントなどを企画
☆NPO・企業・行政と連携した商品開発やイベント企画等
☆留学生による料理を通じた文化交流や地域交流

これまでに助成金を受けて活動を展開したゼミ

どこでも絵本プロジェクト (児童学系科専攻ゼミ)
Unity (人間福祉学系科小笠原ゼミ)

助成金を希望する場合
1. まずは、ゼミのプロジェクト担当者様数名で、5月9日(月)、10日(火)に開催する「説明&研修会」に参加をお願いします。
2. 提出いただいた申請書類(5月27日(金)17:00締切り)と、6月18日(土)午後には実施する公開審査会の内容をもって、助成額を決定します。

申し込み・問い合わせ▶▶聖学院大学ボランティア活動支援センター(1号館1階1103教室) TEL:048-780-1705 MAIL:vol-sup@seigaikuin-univ.ac.jp 詳細は裏面をご覧ください

■ サボメンサボメンボランティア企画

「Nice to meet 友 Day01/Day02」

■ ボランティア・まちづくり活動助成事業(裏面)

2022年度聖学院大学ボランティア・まちづくり活動助成事業 募集要項	
応募資格	地域へ貢献する意欲を持った聖学院大学の学生5名以上が所属する有志のグループ。以下のみなさんは誰でも応募できます。 ① 学内外のボランティア団体 ② ゼミ/アドバイザーグループ ③ 学生会クラブ・同好会 ④ 各種委員会 ⑤ 有志の集まり ※オンライン上でのボランティア活動等、新しいアイデアを持っています。
助成内容	最大 5万円 ※学費から入学金として(チャレンジ助成)最大3万円を差引しています。 ※学内での活動を予定している団体には別途単一明細書からの助成も受けられます。
助成対象経費	活動を行う上で必要な経費全般。ただし、自分たちの飲食代は除く。
応募期間	2022年5月17日(火)~27日(金)
助成対象期間	2022年6月1日から2023年3月までの活動に対して助成
応募方法	① まずは、『説明&研修会』に参加ください。 こちらのURL (https://forms.office.com/r/LW4K3QPJa) もしくはQRコード、もしくは来室で申し込みができます。『説明&研修会』の申し込みはこちら 【説明&研修会】 日時: 5月9日(月)18:00~20:00 5月10日(火)18:00~20:00 ※どちらかにご参加ください。 ② 申請書等も5月27日(金)17:00までにボランティア活動支援センターに提出ください(提出書類や方法は説明会の際にお知らせします) ③ 6月18日(土)の公開審査会(開催方法や詳しい時間は未定)で選考を行います。
選考方法	申請書類と公開審査会のプレゼンテーションの内容をもって助成額を決定します。助成金の交付は6月23日(木)昼休みを予定しています。
報告書の提出と報告会への参加について	報告書は活動終了後1ヶ月以内の提出になります。(ただし、3月の活動は3月末日)また、2023年1月13日(金)に実施予定の活動報告会にて助成対象事業の報告(現在のところ対面にて開催予定)をしてもらいます。
申し込み・問合せ先	聖学院大学ボランティア活動支援センター(1号館1階 1103室) TEL:048-780-1705(平日9:00~17:00) Mail:vol-sup@seigaikuin-univ.ac.jp
その他	特別対応として、予定していた活動が新型コロナウイルス感染拡大等の事由で中止になるなど、活動内容に変更があった場合、助成金の返金を受け付けます。
共催団体	聖学院大学同窓会/社会福祉人上尾市社会福祉協議会 聖学院大学ボランティア活動支援センター/地域連携・教育センター
<p>聖学院大学同窓会会長 島田 大輔 (2005年度 コミュニティ政策学科卒業)</p> <p>ボランティア活動は今、聖学院大学の特色の一つであります。ボランティアを通じて地域や社会への貢献に励む機会を増やせるよう、同窓会としてできる限りサポートしていきたいと思っております。活動が難しい状況ですが、新しい道を切り開き、活躍できることを祈っております。</p> <p>学校法人聖学院は、国連グローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目標とした活動を推進しています。</p>	

2022年第1回 サボメンボランティア企画

Nice to meet 友!
~ 広げよう! 友達の輪 ~

新学期が始まってなかなかうまく話しかけられない...友達を作りたい...!と思いませんか? そんなあなたを学生サポメン(サボメン)がサポートします!一緒に遊んで人と仲良くなるヒントを見つけましょう!

Day 01 日: 6月3日(金) 時間: 12:15~12:55 場所: 1201教室
Day 02 日: 7月1日(金) 時間: 12:15~12:55 場所: 1201教室

「ウソ? ホント? 自己紹介ゲーム」
自分について5つの紹介をしますが、そのうちひとつはウソ。どけがフソなのかみなで当ててください。

「どっちがいい? みんなで教室会議!」
1つのお題について、どっちがいいと思うか教室内で2つに分かれて議論してもらいます。盛り上がること間違いなし!

サボメンによるボランティア紹介もあるよ!

お申し込み方法
ボランティア活動支援センターに来室(1103教室)、もしくは右のQRコードを読み取ってフォームに入力して、6月2日(水) 昼休みまでに申し込みください。

お問い合わせ
ボランティア活動支援センター (1号館1階1103教室)
Tel: 048-780-1705 (平日9時~17時) E-mail: vol-sup@seigaikuin-univ.ac.jp
主催: 学生サポメン(サボメン) / ボランティア活動支援センター

■夏の東北“オンライン”スタディツアー

開催日時
9/5 (月) 13:30~17:00
~6 (火) 10:00~13:30

聖学院大学
東北
オンライン
スタディ
ツアー
2022 summer

東日本大震災を学び、東北の魅力に触れ、語り合う2日間。

聖学院大学は東日本大震災復興支援活動を継続的に行ってきました。引き続き、“オンライン”を通じて、学びと交流の場を持ちます。皆さんの参加をお待ちしています。

募集人数 30名
※前川や東北に思いのある方、ボランティア 教育、福祉、心理、まわりくりに関心のある方には特にオススメです！

対象 聖学院大学の学生・教職員 / Zoomでのビデオ通話※可能な方
※Zoomアプリのダウンロードや参加方法については申込みの際にお知らせします。また、交流企画や振り返りはビデオ、マイクともにオンで参加いただきます。

参加費 500円 ※8/31(水)17:00までに、ボランティア活動支援センターに入室しお支払いください。企画企画や振り返りはビデオ、マイクともにオンで参加いただきます。

申込方法 聖学院大学ボランティア活動支援センターまで入室、またはフォームス (<https://forms.office.com/r/zq6JxnWnJ>) からお申し込みください。

申し込み締切 7月29日(金) ※定員に達し次第締め切りとなります。申し込みはコチラ

主催 聖学院大学ボランティア活動支援センター / 企画・運営：聖学院大学学生有志
協力：Team大川-未来を拓くネットワーク

※現地とオンラインでつなぐ繋がり、新型コロナウイルス感染症拡大状況によっては中止となることもあります。あらかじめご了承ください。

ツアーに関する問い合わせは、ボランティア活動支援センター（1号館1階1103室）まで。
入室・メール・電話、Teamsチャットでも受け付けます。
メール: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp TEL: 048-780-1705 (平日午前9時~午後17時) [詳細は裏面へ](#)

ツアースケジュール (予定)

1日目/9月5日(月) 東日本大震災を学ぶ

13:30~
宮城県石巻市にある旧大川小学校では、2011年3月11日、東日本大震災で発生した津波で児童74名、教職員10名が犠牲となりました。地元を拠点に活動する
“Team大川-未来を拓くネットワーク”の皆さんから、震災前の暮らしのこと、震災当日に起きたこと、これまでの活動やこれからの想いなど、お話を伺います。
15:00~
お話しを受けて何を感じたのか、何ができるか、参加者のみなさんと意見交換を行います。

Team大川代表
兵野哲也さん
東日本大震災の被災者。津波に巻き込まれるも幸い、2022年2月に「復興活動家」の称号を授けられた。被災者の命の取り守りや、被災者の心のケアを支援している。この活動を通じてTeam大川を立ち上げた。

2日目/9月6日(火) 東北の魅力に触れる

10:00~
学生有志企画メンバーが、宮城県石巻市に向き、現地の魅力を生中継で伝えます。
震災当時多くの人々が避難した“日和山”や“みやぎ東日本大震災伝承館”、はたまた、磐島と呼ばれるほだ尻山の狼が住む“田代島”、石巻の美味しいものが目白押し“いしのまき元気いちば”から、現地の様子を配信します。
企画メンバーによる食レポもあるかも？

参加者交流会
事前にお渡しした“東北おすすめの逸品”を、オンラインで繋がりながら一緒に味わいます。

※おすすめの逸品について 小売
8/29(月)~31(水)の間にボランティアセンターにてお渡しし、もしくは郵送します。参加者交流プログラムにて、オンラインで繋がりながら一緒に味わいますので、自宅でお賞しください。



このツアーは、以下の学生ボランティア（プロジェクトリーダー）により企画・運営されています。
心療福祉3年 太田 菜乃、児童学科3年 中尾 友祐、
政治経済学科2年 堂元 弥生、日本文化学科2年 仁科 穂遠、心療福祉学科2年 山口 美南

■新聞紙エコバックづくりワークショップ

日 程：11月29日(火)
12:15~12:55

場 所：1203教室

持ち物：はさみ、スティックのり (あれば)

申込み：ボランティア活動支援センターに入室。

学内でできるボランティア活動です。
楽しく交流しながら、身近な“エコ”を一緒に実践しませんか？

《ボランティア活動支援センター》
場 所：1号館1階1103教室
入室時間：平日9:00~17:00 (11:10~12:10昼休み)

■ボラフェス！ボランティア募集

ヴェリタス祭で福祉施設、海外支援団体を応援しよう！

ボラフェス！ボランティア募集

久々の対面開催となったヴェリタス祭で、福祉施設や海外支援団体の活動を応援するボラフェス！を実施します。シフト交代制でヴェリタス祭を楽しみながらボランティアが可能です。皆さんの応募をお待ちしています！

活動日
準備日：11月1日(火) 10:00~15:00 ごろまで
本番1日目：11月2日(水) 9:00~16:00 ごろまで
本番2日目：11月3日(木) 9:00~17:00 ごろまで
1日、半日からの参加も可能です！また、毎週水曜2限の時間に看板づくりなどの準備作業を行っています。よければこちらも参加ください。

活動内容
準備日：会場設営や装飾など
本番：来場者への案内、施設や団体の方の販売のお手伝いなど

応募方法
右側のQRコードから申し込みをするか、ボランティア活動支援センターに入室して申し込みください。

聖学院大学ボランティア活動支援センター
1号館1階1103室 入室時間：平日9:00~17:00 (11:10~12:10 ものをぞく)

■ボラフェス！ポスター

LET'S GO

ボラフェス！

2022

地域の福祉施設さんによる手作り商品（お菓子、野菜、小物など）や海外支援団体が活動している現地の民芸品の販売＆活動紹介などいもボランティア活動等でお世話になっている近隣や卒業生の働く福祉施設、海外の子どもたちを支援している団体をお招きして、手作り商品の販売やワークショップの実施、活動紹介などを行っています！皆様のご来場をお待ちしています♪

11/2日(水)、3日(木)
10:00~15:00
聖学院大学エルピス食堂(エルピス館1階)

●11/2(水)出展団体
医療法人大社会 地域活動支援センターベルベチオ(アート作品)
社会福祉法人あらかぎ社会 芸術と実学の館「舞舞」(和菓子)
社会福祉法人協の館 第2川根ののり子作樂所(おせんべい)
NPO 法人とさき 生活介護とさき(野菜、小物)
NPO 法人あのみ 職業訓練センターアルス(コーヒー、点字商品)
NPO 法人リトルポケット あどろえんさんとむ(筆小物)

●11/3(木)出展団体
アパ/アパの会×あかから未来会議(小物、ワークショップ)
マンスクールをえる会(小物)
社会福祉法人あけおろし社会 多機能型事業所フラスハート(野菜、小物)
社会福祉法人一葉福祉会 ワークス(お菓子)(木工品、ワークショップ)
NPO 法人とさき 生活介護とさき(野菜、小物)
NPO 法人みやほら福祉会 ひびき(小物)

主催：ボラフェス！2022 実行委員会 / 聖学院大学ボランティア活動支援センター

■「カラコエの花」上映会参加者募集

知らない→知っているへ、最初の一歩を踏み出しませんか？
レインボーリール東京～東京国際レズビアン&ゲイ映画祭～グランプリ受賞

ある高校2年生のクラス、ある日突然にLGBTについて授業が行われた。生徒たち、疑問が生じる。授業は行われた。しかし、先生たちの日常に波紋が広がっていき……。思春期ならではの心の葛藤が起きた行動とは……？

「カラコエの花」

上映会参加者募集

日時：11月23日(水) 10:40~12:10 (※上映時間39分 / その後、感想シェア会あり)
会場：4402教室 定員：28人 (※先着順) (※事前予約制) ◆料金：無料◆
◆☆☆☆☆☆締め切り：10月18日(金) 昼休み◆

※定員になり次第、予約受付終了。定員に満たない場合や、キャンセルが出た場合のみ当日募集あり。
予約方法：QRコードを読み取り、フォームに入力してください。

お問合せ：ボランティア活動支援センター 1103教室(1号館1階)
TEL:048-780-1705(平日9時~17時) / E-Mail:vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp
主催：学生有志グループ「ジェンダー勉強会」&学生有志「ボランティア活動支援センター」

■「カラコエの花」上映会スタッフ募集

学内映画上映会

スタッフ募集

上映映画：「カラコエの花」(内容はチラシ下部のあらすじ参照)

スタッフ活動内容：上映会の広報・当日の受付・感想シェア会の進行

活動期間：10/18(火) 昼休み顔合わせ~11月23日(水) 上映会まで(毎週火曜日・昼休みミーティングあり)

参加条件：聖学院大学の学生・できるだけミーティングに参加できる人・性の多様性に理解のある人
向いている人：映画が好きな人・LGBTQについて知り、考えたい人

応募方法：右のQRコードを読み取って、フォームに入力してください

☆☆☆☆☆締め切り：10月14日(金) 昼休みまで☆☆☆☆☆

お問合せ：ボランティア活動支援センター(1号館1階1103教室)
Tel:048-780-1705(平日9時~17時) / E-mail:vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp
主催：学生有志グループ「ジェンダー勉強会」/ ボランティア活動支援センター

告知 11月23日(水) 上映会「カラコエの花」
10:40~12:10
4402教室 定員30人
無料
締切申込受付：10月下旬開始予定、お楽しみに！
公式サイト

あらすじ
とある高校2年生のクラス、ある日突然にLGBTについての授業が行われた。しかし、他のクラスにLGBTの授業が行われておらず、生徒たちに疑問が生じる。「うちのクラスにLGBTの授業があるのじゃないか?」生徒らの日常に波紋が広がっていき……。思春期ならではの心の葛藤が起きた行動とは……?

■小さなボラセン(第1回、第2回)

ボランティア活動をしてみたいけど、勇気がでない。
ボランティア活動支援センターに行ってみようけど、ハードルが高い。

「下は川をのぼる?」
「え、川をのぼる?」

主催：学生サポートセンター(1号館1階) / ボランティア活動支援センター

12月6日・12月15日
12時10分~13時00分
4号館食堂前開催

小さなボラセン

■ サポメン！ ボランティアサロン

ボランティア GRACE × Petite Arche

ボランティア活動の世界に
たまたま 飛び込んだ新井（政治経済学科4年）
& 1年生の時からボランティア活動に
燃えていた 金久保（児童学科4年）

トークセッション

開催日 12月20日(火) 17時~19時

Hosted by サポメン！ ボランティアサロン

~登壇者紹介~

新井 乾斗

金久保 仁

About

場所： 1号館地下1階1cafe
対象： 聖学院大学全学生
申込方法： フォームで応募いただくか、ボランティア活動支援センターに
来室して申し込みください。
申込締め切り： 12月16日(金)13:00
問合せ： ボランティア活動支援センター（1号館 1階 1103教室）
Tel : 048-780-1705 (平日 9時~17時) E-mail : vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp

■ 小さなボラセン(第3回)

ボランティア活動をしてみたいけど、
勇気がでない。
ボランティア活動支援センターに行
ってみたいけど、ハードルが高い。

開催日 12月12日(木) 12時10分~12時45分
エルピス館2階開催

小さなボラセン

■ 冬の東北ボランティアスタディツアー

聖学院大学
東北
ボランティア
スタディ
ツアー
2023 winter

開催日時 2/18(土)朝 ~ 2/20(月)夜
活動場所 宮城県石巻市

現地に足を運び、
東日本大震災を知る
学びと語りの3日間

聖学院大学は東日本大震災復興支援活動を継続的に行ってきました。
3年ぶりに現地へ足を運び、学びと交流の機会を持ちます。皆さんの参加をお待ちしています。

事前説明会 2/8(水) 13:00~15:00 (対面・オンラインのハイブリット開催)

募集人数/対象 15名/聖学院大学の学生

活動場所/内容 宮城県石巻市にて、震災遺構の見学、意見交換ワークショップ、
地元の方々との交流活動、東北の魅力発見などを予定

参加費 10,000円
※内訳：宿泊費、一部食費、現地までのバス代等は大学が負担します。
※18日(土)の昼食、夕食、19日(日)の夕食、20日(月)の昼食は各自負担です。
※ボランティア活動保険に未加入の方は、別途保険料500円が必要です。

申し込み 参加申込書に必要事項を記入の上、参加費を添えてボランティア活動支援センターに
提出下さい。申込書もセンターで配布していますので、まずは一度来室ください。
申し込み締切：2月1日(水) 17:00(切) ※定員に達し次第締め切ります。

主催：聖学院大学ボランティア活動支援センター/企画：聖学院大学学生有志/協力：Team大川-未来を拓くネットワーク
※新型コロナウイルス感染症について対策を徹底し実施しますが、感染症拡大状況によっては中止となることもあります。
あらかじめご了承ください。

ツアーに関する問い合わせは、ボランティア活動支援センター(1号館1階1103室)まで。
メール: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp TEL:048-780-1705 (平日午前9時~午後17時)

訪問場所と、ツアーで関わる地域のみなさんについて

石巻市震災遺構大川小学校・大川震災伝承館

宮城県石巻市にある旧大川小学校では、2011年3月11日、東日本大震災で発生した津波で児童74名、
教職員10名が犠牲となりました。慰霊・追悼の場とともに、震災被害の事実や事前防災、人と
人のつながり重要性を伝え、未来を拓いていく場として、広く公開しています。

VOICES：東日本大震災8年「あの日」に向き
合い続ける元教師 - YouTube
毎日更新 2019年3月8日公開

Team大川-未来を拓くネットワーク-

大川小学校の卒業生など、若者が中心となって立ち上がった「Team大川-未来を拓くネットワー
ク」は、「子どもたちのいのちを真ん中」というメッセージを掲げ、地元を拠点に活動しています。
今回のツアーではTeam大川の皆さんとの交流を通して、震災前の大川地区での暮らしについて、震災
当日に何が起きたのかについて、またこれまでの活動やこれからにかける想いなどお話を伺い、地域や
私たち自身の未来のために私たちは何ができるのか、一緒に考えていきたいと思います。

Team大川代表 只野哲也さん

震災当時大川小の5年生。津波に飲まれるも生還。2022年2月に「震災遺構
となった母校の今後の在り方を考え、未来の子どもの命を守る活動をしてい
く。」ため仲間と共にTeam大川を立ち上げる。

「奇跡の少年」と呼ばれ英雄も人生をかける目
標「新しい街を」- YouTube
TBS NEWS DIG 2022年3月11日公開

「楽しみだけの場所じゃなかった」故郷を再び集
える場所に「被災大川小」の若者たちのその後と
は | tbcニュース | tbc東北放送(1ページ) | tbc.co.jp
tbc東北放送 2022年9月14日公開

■「共に育つ“学生×大学×地域”—人生に響くボランティアコーディネーション」

出版記念シンポジウム



「共に育つ“学生×大学×地域”
—人生に響くボランティアコーディネーション」出版記念シンポジウム

オンライン配信のご案内

聖学院大学では「神を仰ぎ人に仕う」という建学の精神により、学生によるボランティア活動が盛んに取り組まれてきました。2011年に起きた東日本大震災においても、多くの学生・教職員が支援活動に関わり、2013年にボランティア活動支援センターが設立されました。
今年度、開設10年の節目を迎えることとなりましたが、この間、学生たちの活動はより幅広く展開され、多くのメディア等で紹介され、2018年度には「ボランティア活動者労働大臣表彰」も受賞しました。
この度、開設10周年を記念しまして、これまで助けてきた物語やボランティアの魅力を「学生」「大学」「地域」それぞれの立場からまとめた書籍を出版する運びとなりました。
書籍出版を記念してシンポジウムを実施いたします。オンラインでのご観覧お待ちしております。

日時：2023年3月21日（火・祝）13：00～14：40
以下のURLもしくはQRコードよりお申込みいただいた皆様へは後日配信URLをメールでご案内いたします。また、3月10日曜大学HPでも配信URLを掲載いたします。
お申込み：https://forms.office.com/r/pQx0bg33ts 申し込みQRコード

主催・お問い合わせ
聖学院大学ボランティア活動支援センター
〒362-8585 埼玉県上尾市戸路1-1
TEL: 048-780-1705（平日9:00-17:00） E-mail: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp



シンポジウム詳細

- 1.開 会
- 2.第一部
導 入 若原卓範（ボランティア活動支援センター所長、政治経済学准教授）
書籍第I章 学生ボランティア支援の理論と実際
書籍第II章 学生ボランティアの可能性
概要説明：川田虎男（ボランティア活動支援センターアドバイザー）
エピソード報告：丸山阿子（元コーディネーター）
菅野雄大（卒業生、元STEP代表、学生サポートメンバー）
戸澤弘子（コーディネーター）
- 3.現役学生ボランティアによる活動報告
- 4.第二部
書籍第III章 学生ボランティアと地域
書籍第IV章 学生ボランティアと大学
概要説明：平修久（ボランティア活動支援センター前所長、名誉教授）
エピソード報告：鈴木裕子さん（認定NPO法人彩の子ネットワーク共同代表）
新井達也先生（自由の森学園高等学校前校長）

- 5.総 評
- 6.まとめ
- 7.閉 会

書籍「共に育つ“学生×大学×地域”
—人生に響くボランティアコーディネーション」について



ボランティア活動を通じてともに変化する「学生・大学・地域」。ボランティア活動支援センターの中核にある「人生に響くボランティアコーディネーション」の実践に注目し、その意義を明らかにしながら理論化を試みる1冊です。全国の書店やAmazonで購入可能です。



■ ボランティア活動支援センター10周年の集い

SEIGAKUIN UNIVERSITY
VOLUNTEER SUPPORT
CENTER
10TH ANNIVERSARY
PARTY!
2023.3.21(TUE)
13:00~17:00 入場自由

2012年4月に発足した聖学院大学ボランティア活動支援センターが、今年度設立10周年を迎えました。この間たくさんの聖学院生がボランティア活動に関わり、社会に貢献するとともに活動を通して大きく成長を遂げました。そんな、学生・卒業生一人ひとりがボランティアによって一歩の覚悟です。
そこで設立10周年を記念して、これまで聖学院大学でボランティアに携わった多くの卒業生や現役の学生、教職員が集いを開催することになりました。みなさんぜひ、ご参加ください。

会場 聖学院大学チャペル（懇親会はエルビス食堂で実施）
対象 聖学院大学で学生時代ボランティア活動に取り組んだ人
現在ボランティア活動に取り組む現役学生
ボランティア活動の応援に尽力した教職員
ボラセン10周年書籍発行記念シンポジウム・現役学生による活動報告懇親会（詳細は裏面参照）
参加費 無料
その他 ご夫婦、お子様のご参加大歓迎！（学生による子ども遊びコーナー実施予定）授乳スペースあり
当日のスクールバスの運行はありません。徒歩またはタクシー、自家用車でのご来場ください※駐車場が満車の場合、周辺のコインパーキングなどをご利用ください。
申し込み方法 3月10日（金）までに、QRコードからお申込みください。
主催・問合せ先 聖学院大学ボランティア活動支援センター（048-780-1705）

申し込みはこちら！

ボラセン10周年記念企画進行中！

ボラセン10年の歩みをまとめた書籍発行！

2023年3月に「共に育つ“学生×大学×地域”人生に響くボランティアコーディネーション」とのタイトルで、ボラセン10年の歩みをまとめた本が刊行されます。全国の書店やAmazonでも購入可能です。約50名の執筆者の半分は、在学生・卒業生です。

聖学院生のボランティアの歩み（＝ボラセンの歩み）が、全国に発信されることとなります。3月21日のイベントでは、執筆者によるトークセッションの他、書籍の販売も予定しています。

卒業生×在学生で10周年イベントを企画中！

現在進行中の企画 2022.12現在

- ・市内長平先生による縁起物講座（縁起物・物品の歴史を交付）
- ・卒業生×在学生による「ボラセン」トークショー
- ・書籍「10周年記念グッズ作成」
- ・書籍販売と執筆によるワンダフルイベントの開催について、両者の実行要領に付でもお昼休みに開催。

実行委員メンバー

- ※コロナは学生時代のボランティア
- 110生 山口麗大（SAVE）
- 111生 菊池拓太郎（SAVE）
- 112生 藤田友利（白鷺：藤川）（SAVE）
- 113生 野村英輝（白鷺：赤船）（進フェス）
- 114生 金子萌葉（SAVE、手話）
- 115生 菅野雄大（STEP、）
- 116生 吉田樹雄（白鷺：菟木）（STOP）
- 117生 高橋雄太（グレイズ）
- 118生 玉之内真（SAVE）、姫野麗菜（SAVE、手話）
- 119生 金久保仁（グレイズ）- 中川龍彦（SAVE）
- 120生 榎本愛音（いちごとりどり）
- 121生 余田梨華（こどもちゃれんじ）

※実行委員以外にも多くの在学生・卒業生が準備に関わっています。

聖学院大学 ボランティア活動支援センター 2022 年度事業報告書

2024 年 3 月発行

発行

聖学院大学ボランティア活動支援センター

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1

TEL: 048-780-1705

FAX: 048-781-0094

URL: <https://www.seigakuin.jp/life/seig-volunteer/>

E-mail: vol-sup@seigakuin-univ.ac.jp



学校法人聖学院は 2018 年 4 月、
グローバル・コンパクトに署名・加入し、
SDGs を目指した活動を行っています。